INDEX

リレー随想 日々感懐（財団法人厚生年金事業振興団常務理事 松田 朗氏）（p1）／助成案件・一般演題募集（p2）／留学体験記2編：小竹佐智代氏（p4）、高橋理氏（p6）／研究助成成果報告3編（p8）／「温故知新」－助成研究者は今－（今中雄一氏）（p11）／第13回フォーラム及び平成18年度研究助成金贈呈式を開催（p12）／第15回（平成18年度）助成案件採択一覧（p16）／第３回ヘルスリサーチワークショップを開催（p18）／第３回HRWに参加して（小川寿美子氏、両角良子氏、尾形裕也氏、柴田睦郎氏）（p22）／第30回評議員会、第30回理事会を開催（p24）／平成19年度事業計画概要、予定表（p26）／第14回ヘルスリサーチフォーラム予告（p28）／ご寄付のお願い（p28）／編集後記（p28）

HEALTH RESEARCH NEWS

Pfizer

Vol.49

2007年4月

ヘルスリサーチニュース

主な内容

助成案件募集・一般演題募集　平成１９年度の研究助成の募集と１１月に開催のヘルスリサーチフォーラムでの一般演題を募集します。

「温故知新」－助成研究者は今－　過去の採択者の、ご研究のその後と近況をレポートする本欄では、第３、４、１４回の３回に亘り助成を受けられた今中雄一先生にご報告頂きました。

第13回ヘルスリサーチフォーラム開催　今回のフォーラムはメインホールでの発表に加えて５会場でのポスター形式によるランチョンセッションが併催されました。

第3回ヘルスリサーチワークショップ開催　今回のテーマは“End of Life”です。４つの分科会で熱い議論が繰り広げられました。

第１４回リレー随想　日々感懐

『医療費適正化計画は誰のためにある？』

松田　朗
財団法人
厚生年金事業振興団
常務理事

昨年の通常国会で、健康保険法等の一部を改正する法律が成立した。これによって、わが国における医療保険制度はかつてない大変革を遂げようとしている。

国は、国民皆保険を堅持し、将来にわたり持続可能なものとしていくため、医療費適正化を総合的に推進するとともに、これまでの老人保健法に基づく老人医療制度に代わって、新たな高齢者医療制度を創設（「高齢者の医療の確保に関する法律」に改正）し、大小様々の形で存在している保険者の再編・統合に向けて所要の措置を講じている。

この中で特に注目すべきは高齢者医療確保法に規定されている「医療費適正化計画」である。この計画は、平成20年度を初年度とする5年計画でスタートするが、その政策目標は生活習慣病予防の徹底と平均在院日数の短縮である。そして計画最終年の翌年（平成25年度）には実績を評価し、場合によっては、都道府県の意見に配慮して、国は診療報酬を定めることができるようになったのである。つまり、これまでは全国一律であった診療報酬単価に、都道府県によっては単価差が生じる余地が生じたのである。

以上のような「医療費適正化計画」に伴って生ずるであろうと想定される諸問題は、ヘルスリサーチャーにとって格好の研究対象となるのではないだろうか。

次回は厚生労働省大臣官房厚生科学課長　藤井　充 先生にお願い致します。

● 第16回（平成19年度） 研究助成案件 を募集します

第16回研究助成案件の募集を下記の通り行いますので、ご案内申し上げます。
詳細については、当財団ホームページ、又は、各大学、研究機関などに送付しております案内ポスターや募集広告をご覧下さい。

研究対象　保健医療・福祉分野の政策、あるいはこれらサービスの開発・応用・評価に資するヘルスリサーチ領域の研究

応募規定

1. 国際共同研究助成　（期間1年間）　500万円以内／1件　6 件程度
   共同研究者：海外研究者を1名以上含めること
2. 若手研究者育成助成―国内共同研究
   （期間1年間）　200万円以内／1件　7 件程度
   但し年齢制限（平成19年4月1日現在）40歳以下
   共同研究者：同一教室内の研究者は対象としない

応募期間　平成19年4月～平成19年7月6日（金）（当日消印有効）

助成決定　平成19年9月下旬

応募方法　応募要綱・申請書サンプルをご希望の方は、本財団のインターネットホームページからダウンロードをお願い致します。
申請書はホームページ上の入力フォームからのみ作成可能です。
作成した申請書をプリントアウト後、署名・捺印し、必要書類と共に本財団までご郵送下さい。

● 第14回ヘルスリサーチフォーラム 一般演題 を募集します

本年も下記により、第14回ヘルスリサーチフォーラムの一般演題を募集致します。
申込期間は4月～7月6日（金）（当日消印有効）ですので、振ってご応募下さいます様お待ち致しております。

◆ フォーラムのテーマ
新しいヘルスリサーチを拓く

◆ 研究内容
医療制度・政策、医療経済に関する研究、保健医療の評価に関する研究、保健医療サービス、医療資源の開発に関する研究等

◆ 応募方法
財団ホームページから、財団所定の申請書式（Windows Word、Macintosh Wordファイル）をダウンロードして、必要事項をパソコン入力の上、当財団事務局宛にファックス、或いは郵便でお送り頂くと同時に、E-mailにWordファイルを添付して、当財団メールアドレスへお送り下さい。

◆ 申込期間
平成19年4月～平成19年7月6日（金）（当日消印有効）

◆ 発　表
組織委員会で採否を決定します。採用の場合は、平成19年11月10日（土）　会場「千代田放送会館」（東京都千代田区紀尾井町）で開催する第14回ヘルスリサーチフォーラムにおいて15分程度（含むQ&A）のホールセッションでの発表、或いは当日同会場で併催するポスターセッションでの発表となります。
詳細は採否決定の連絡と共に、7月末頃にお知らせ致します。

◆ 発表演題の機関誌等への掲載
フォーラムで発表された研究内容は、財団の機関誌（本誌）等へ掲載致します。また、第14回ヘルスリサーチフォーラム講演録としてまとめ、配布致します。

◆ 演題発表のための交通費
演題が採択された場合、首都圏以外（但し海外を除く）の一般演題発表者（発表者本人のみ）には、フォーラム開催都市までの交通費を財団の規定により支給します。（宿泊費につきましては発表者の負担となります。）

平成１９年度
研究領域と例示

ヘルスリサーチとは

一人ひとりのクオリティー・オブ・ライフ（QOL）の向上を目的として、
自然科学（医学、薬学、健康科学等）や社会科学（法学、経済学、社会学等）の成果を基に、
全ての人が最高の医療を享受できるための仕組みを研究する学問です。
本財団は国際的視点からのヘルスリサーチの研究を助成します。

研 究 例 示

▼制度・政策 に関する研究
- 医療・介護サービスの質の確保に関する制度の研究
- 法・生命倫理と医療サービスの研究
- 医療保険制度・介護保険制度の研究
- 薬価・薬事制度の研究
- 人口減少社会における医療福祉の研究　　など

▼医療経済 に関する研究
- Pharmaco Economicsの研究
- 医療における費用対効果の研究
- 医療における技術革新の経済評価の研究
- 医業経営に関する研究　　など

▼保健医療の評価 に関する研究
- 医療の質とEBMの適用の研究
- 文化・制度の違いによる疾患治療の相違の国際比較研究
- 保健医療のOutcomeの研究
- 医療福祉経営における品質管理手法の研究　　など

▼保健医療サービス に関する研究
- 患者・家族の精神的ケアの研究
- 保健医療サービスにおけるヘルスプロモーション等の研究
- 在宅医療を含む医療施設の機能評価の研究
- 情報化社会の保健医療に及ぼす影響の研究
- 患者の受診行動とヘルスコミュニケーションの研究
- 保健医療における危機管理の研究　　など

▼保健医療資源の開発 に関する研究
- 医学教育を含むヘルスマンパワーの研究
- ゲノム開発等のイノベーションと新薬開発コストに関する諸問題の研究
- 新薬開発のグローバリゼーションと薬事政策に関する国際比較研究
- 医療と知的財産権に関する研究　　など

研究助成のご応募、並びに一般演題のご応募は
まず、当財団ホームページへ
▼

http://www.pfizer-zaidan.jp

サンダーランド大学留学を終えて
ー多国籍文化における看護ー

University of Sunderland, Overseas Nurses ’Programme学生　**小竹佐智代**

留学の目的

私は、2005年9月から約1年間、イギリスのサンダーランド大学看護学科に留学しました。イギリスにおける医療制度の実際を知り、また、私の研究テーマであるコンチネンスケアが地域にどのように浸透しているのかを確かめたいということが留学の動機でした。

留学先（英国・University of Sunderland）の概要

サンダーランドはイギリス北東部の人口約178,000人の都市で、サンダーランド大学は中心部地域にあります。サンダーランドは第二次世界大戦前後に造船業と炭鉱で栄えた町で、海が近く丘に登ると北海を望むことが出来る田舎街です。サンダーランド大学は現在、6学部

Arts, Design, Media and Culture
Sunderland Business School
Computing and Technology
Education and Lifelong Learning
Health, Natural and Social Science
Graduate Research School

で構成されています。

2005年7月　卒業式にて。

看護学科の概要

イギリスでは看護大学は3年間の課程になっています。私が留学した学部はHealth, Natural and Social Scienceの看護学科で、3学年次（レベル3）への編入学でした。看護学部の学生はフルタイムの学生（Overseasの学生）とパートタイム（Britishまたは、労働許可を有する学生）がいました。イギリスでは看護師を含む医療従事者の生涯学習を強く推進しており、既に看護師として医療施設に勤務している看護師が、特定の専門科目を習得したり、学位を取得したりするために大学を中心とした教育施設に通学することが珍しくありません。雇用側（政府、病院等）は通学のための勤務時間の考慮はもちろんのこと、学費を一部または全部負担して通学するシステムが確立しています。留学生は1年かけて卒業するのですが、パートタイムの学生は2年から3年かけて、それぞれの仕事や家庭の事情に合わせながら卒業できる仕組みになっています。講義時間も勤務の後に出席できるように殆どの科目が夕方に開講されており、これはフルタイムの留学生にとっても大変都合のよいものでした。つまり、留学生も個人の状況に合わせ、昼間は語学学校に通ったり、指導教員との面接を受けたり、時にはボランティア活動をするなど、一日を有意義に使用できました。講義は約20ー30人程度で受けますが、殆どの講義にグループワークやディスカッションが設けられ、互いの臨床経験を元に、イギリスの看護制度だけでなく、看護の共通点や文化/歴史による違いも含め、活発に意見交換が行われました。また、プレゼンテーションの準備など、実際に作業を通してお互いを理解していく中で、様々な国における文化、価値観、宗教観、健康観について触れることが出来ました。これは、日本に住んでいたころの私では到底経験できない貴重な経験で、今後日本でも更に拡大していくと考えられる、患者・医療職者の人種（文化）多様化に向けての私自身の準備の第一歩であると確信しました。大学卒業後、現在私はイギリスでの

留学体験記

平成16年度若手海外留学採択者

2005年7月　Durhamのお祭り。

2006年4月　公園からの北海の眺め。

看護師資格取得のためのOverseasナースのためのプログラムを受講しており、実際にナーシングホームでの実習を行っているのですが、大学でのこれらの異文化交流の体験をもとに、様々な文化が混在するイギリスでの医療現場に必要な医療者間、また患者・看護師間の人間関係を構築しようと日々努力しているところです。

留学で得たこと、今後の課題

留学期間中の学びで特に興味深かったことは、イギリスにおける医療制度の変遷とその背景、医療事故の防止と看護の質の向上のための理論と実践、そして患者中心の医療提供と協働についての学習でした。イギリスにおける医療費の増大と、人種間、地域間での不平等が激しいことが現在非常に深刻な問題となっています。また、イギリスでは健康レベルも経済レベルも地域格差が激しく、イギリス北東部のサンダーランドは、実際に肥満、十代の妊娠、COPD、心血管疾患等々、健康問題を大きく抱えた地域です。それらの問題に対し、かかりつけ医（GP）とともにまず一番初めに患者と出会うプライマリー看護師、病院勤務看護師、地域で活躍する保健師、各スペシャリストナースがそれぞれの専門性を持ち寄って協働することが求められるわけですが、実際にコンチネンス外来を訪問した際に、コンチネンスケアナースと他職種との人間関係の壁が非常に低く、現実的に機能的に協働していることに感銘を受けました。また、コンチネンスケアにも地域の抱える問題が大きく影響しており、例えば、サンダーランドでは居住者の肥満と大量飲酒がコンチネンス外来に寄せられる相談に影響を強く与えていると言うことでした。更に、多文化社会における患者―医療者の人間関係の構築もまた複雑であり、様々な状況下で他者を尊敬し尊重することの難しさを体験しました。今後の私の課題は、これらの体験から得た学びを様々な人々に伝え、共に考えていくことだと考えています。

最後になりましたが、今回の留学の機会を与えていただきましたファイザーヘルスリサーチ振興財団ならびに、留学に向けて支援くださいました山形大学佐藤和佳子教授に深く感謝し、御礼を申し上げます。ありがとうございました。

小竹　佐智代

受入機関	University of Sunderland（英）
取得学位	Bachelor of Science, Nursing
留学期間	2005年9月～2006年9月

※平成19年度（2007年）は海外留学助成プログラムの公募は致しておりません。

ハーバード留学体験記

聖路加国際病院一般内科／
聖ルカ・ライスサイエンス研究所臨床実践研究推進センター　**高橋　理**

この度は、財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団の若手研究者育成海外留学助成より、平成16年7月から1年間アメリカ・ボストンのハーバード大公衆衛生大学院（HSPH）に留学する機会を与えて頂きまして誠にありがとうございました。

留学動機

私は、一般内科医として5年間臨床経験を積んだ後、京都大学大学院医学研究科にて、臨床疫学的手法を3年間学び臨床上の疑問解決のための臨床研究を行なっていました。しかし、日本では臨床疫学や生物統計学などの学問の歴史が浅いため、アメリカの公衆衛生大学院で更なる研鑽を積みMaster of Public Health（MPH）取得目的のため、留学を決意しました。

HSPH

HSPH（写真1）は1922年にアメリカで初めての公衆衛生大学院として、マサチューセッツ州ボストン市のロングウッドメディカルエリア（写真2）に創立されました。このエリアには、Harvard Medical School、Brigham Women's Hospital、Children's Hospital Bostonなどの提携病院や、Dana-Farber Cancer Institute, Joslin Diabetes Centerなどの有名な医療関係の施設が集っています。

HSPHのMPHは次の7つのコースに分かれています。1）Family and Community Health, 2）Health Care Management 3）International Health 4）Law and Public Health 5）Occupational and Environmental Health 6）Quantitative Method 7）Clinical Effectivenessで、これらから1つを選択します。

写真1）Harvard school of public healthの前にて

写真2）Harvard Medical Schoolの前にて

Clinical Effectivenessコース

私は、臨床研究に興味のある医師を対象としたClinical Effectivenessコースを選びました。このコースの特徴のひとつは、夏期講習が必修になっていることです（通常は9月から）。夏期講習では臨床医が臨床研究を行うために必要な臨床疫学と生物統計学の知識を、7月1日から1ヶ月半の短期間集中で毎日休みなく講義とコンピュータ実習で学びます。

早いスピードで講義、実習が行われるため、心身ともにきつい時期でしたが、授業はとても新鮮で興味深いものでした。スケジュールがこと細かく決められ、授業以外の時間に補習時間が設けられ、教官は学生からの質問に積極的に応じるなど、学生の学習意欲に応え、高めるシステムがうまく機能していました。各授業の最後には学生からの講義の評価が行われ、教官と学生とのいい意味での緊張感を保ちながら、目的をもって学ぶことの大切さと知識を習得することの楽しさを実感いたしました。夏期講習の臨床疫学コースの最終日には、自分のプロジェクト（臨床研究）を指導教官や学生の前で研究発表します。私は、“脳内出血患者の予後予測モデル”を発表しました。そのプロジェクトの成果を留学中にどうにか論文にまとめ昨年英文雑誌に掲載しました。

論文作成でお世話になったCook教授（写真3）は、Clinical EffectivenessコースのDirectorであり、

留学体験記

平成１６年度若手海外留学採択者

写真3）Harvard school of public healthのCook教授とともに

レッドソックスと阪神タイガースをこよなく愛する面倒見のよい日本好きの研究者でした。彼と共同で論文を作成できたことはとても貴重な体験でした。研究目的の的確さ、厳密で正確な分析、最も伝えたい結果を論文に簡潔にまとめることなど、研究の厳しさと楽しさを教わったように思います。帰国後も何度かメールで論文作成のサポートなど論文掲載まで根気強くアドバイスをしてくださりました。

夏期講習後のClinical Effectivenessコースの年間スケジュールは、秋・冬・春の各学期に行われる３００以上の授業の中で必修科目と選択科目で合計４０単位を取得し1年で卒業となります。特に、興味深かった授業は、Decision Analysis in Clinical Research, Applied Regression for Clinical Research, Applied Longitudinal Analysis, Measuring Health Status, Propensity score, Data mining などでした。他には、毎週金曜日に朝7時４５分から9時までSeminar in Applied Research in Clinical Epidemiologyが行われ、Brigham Women's HospitalやMassachusetts General Hospital のフェローたちが現在取り組んでいる、またはまとめている臨床研究を発表しています。モーニングコーヒーとドーナツなどの朝食を摘みながら様々の分野の研究を１年通して見学できたことは臨床研究のテーマを考える上でよい経験となりました。

留学先での生活

ボストンでの初めての海外生活は、刺激のある毎日でした。ボストンは、レンガ造りの古い町並みが沢山残っている米国建国歴史のゆかりの街です。ボストン美術館、科学博物館、ボストン交響楽団などに代表される芸術の街であり、周辺にはハーバード大、マサチューセッツ工科大学を初めとして約６０もの大学があり大学の街としても知られています。スポーツも盛んで、今シーズン松坂投手が大リーグ初参加のレッドソックスは熱狂的なファンが多く、2年前のワールドシリーズ優勝パレードは大変な賑わいでした。私の滞在していたブルックライン市はボストン市の隣の町で、緑豊かな公園が沢山あり、比較的治安のよい地域で、日本人が沢山住んでいることでも有名で、日本では普段お会いできないと思われる、医療関係者はもちろん、経済・政治・科学分野の日本研究者の方々との交流も刺激的でした。しかし、ボストンは北海道と同じ緯度のため、冬の吹雪と零下２０度以下になる寒さは少々つらい経験でした。

ＨＳＰＨでの１年間の授業は、日本の大学院で勉強した知識をまとめ、発展させ、昨年京都大学大学院医学研究科博士課程を修了するのに十分役立つ内容でした。よく練られた効率のよい授業内容、学生の積極的な授業への参加、指導教官とその周辺指導者からのサポートの充実さに支えられているからだと思います。臨床研究者を育てるという明確な目的をもった教育システム作りが今後日本でも必要になるのではないでしょうか。この経験をいかして、日本での臨床研究、またそれによる日本の医療の質の向上に貢献していきたいと考えております。

また、留学するに当たり、私のように家族を持っている方は家族の協力が大切と思われます。幸い、家族3人でアメリカに入国し、4人で日本に帰国できました。海外で出産を経験し患者サイドからアメリカの医療を体験できたことは帰国後に日本の保険医療制度を考える上で貴重な経験でした。これも、留学に対する家族の理解とサポートがあってこそ可能であったと思います。

最後に、今回の留学にあたりこのような貴重な機会を与えて頂きました元京都大学大学院医学研究科臨床疫学教授（現聖路加国際病院院長）福井次矢先生、そして財政的な援助をしてくださりました財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団に、深く感謝申し上げます。

高　橋　　理

受入機関	ハーバード大学公衆衛生大学院（米）
取得学位	Master of Public Health
留学期間	2004年7月～2005年6月

※平成１９年度（２００７年）は海外留学助成プログラムの公募は致しておりません。

平成１５年度
国際共同研究Ａ

先進諸国における介護保険制度の国際比較研究
―日本・ドイツ・ルクセンブルクの比較―

研究期間：2003年11月1日～2005年10月31日
代表研究者：国際医療福祉大学大学院　教授　和田　勝
共同研究者：ドイツ連邦共和国（Federal Ministry of Health）元大臣官房介護保険部長　Rudolf , J Vollmer
ルクセンブルグ大公国疾病保険基金ユニオン　会長　Robert Keefer
国際医療福祉大学医療福祉学部　助教授　菅原　琢磨
静岡県立大学　教授　小山　秀夫
国際医療福祉大学大学院　小山　隆一

高齢化、要介護高齢者の増加、家族構造の変化、経済財政状況の悪化等に伴い、介護問題は先進国共通の課題となっている。ドイツでは1995年、ルクセンブルクおよび日本では2000年から介護保険制度が実施されたが、現在までのところ、独立した社会保険システムによって介護対策を講じているのはこの3カ国である。本研究では、ドイツおよびルクセンブルクにおいてその企画立案や実施に直接従事したフォルマー氏及びファイダー氏らの参画も得て、この3カ国の介護保険制度について介護問題とその対応に関する経過、政策立案過程、制度の基本的枠組み、実施状況と諸問題、制度改正の動向、今後の展望などについて調査分析を行った。

3カ国の介護保険制度には、社会保険制度を基本とするという点で共通性が見られるが、保険者の有り様、被保険者及び受給者の範囲、公費負担投入の有無、現金給付の可否等の給付内容、要介護認定などケアマネジメントシステム、公的扶助制度との関連などに関し、種々差異がある。本研究では、これら相違点に関し比較検討を行ない、制度の基本的な枠組みに大きな差異をもたらした社会経済的要因についても明らかにするよう努めるとともに、これらの比較等を通じて、3カ国の介護保険制度に共通する今後の課題について記述した。

また、わが国における介護保険制度の導入と実施の過程について、当時の基礎的な関連資料や事務局内部資料等を基に整理を試み、今後の日本の介護保険制度史研究に資する基礎的資料となることができるよう、整理を行った。

成果発表：

図書

書　　名　日本・ドイツ・ルクセンブルク国際共同研究
介護保険制度の政策過程
著 者 名　和田　勝　編著（主任研究員）
出 版 先　東洋経済新報社
発　　行　2007年7月頃の予定

※当該研究成果は2006年12月に開催された第13回ヘルスリサーチフォーラムで発表されました。

平成１７年度
若手国内共同研究

先端医薬開発での認可制度の比較調査研究

研 究 期 間：2005年11月1日～2006年10月31日
代表研究者：京都大学大学院医学研究科　薬剤疫学分野　教授　川上　浩司
（2006年3月まで東京大学大学院医学系研究科　客員助教授）
共同研究者：国立医薬品食品衛生研究所　遺伝子細胞医薬部第1室　永田　龍二
大阪大学大学院医学系研究科　遺伝子治療学講座　助手　中神　啓徳

日本において医薬品の研究開発に関与している製薬企業、バイオベンチャー、バイオロジクス等先端医薬品の臨床試験や先端医療を実施している医師、我が国における医薬品認可行政機関である厚生労働省医薬食品局審査管理課、（独）医薬品医療機器総合機構を中心に、バイオロジクスの研究開発の動向と評価・審査について広く意見を聴取した。また、海外状況について、米国FDA（Food and Drug Administration；食品医薬品局）におけるCFR（Code for Federal Regulation）や各種ガイドライン、欧州EU（European Union；欧州連合）におけるEC（European Council；欧州委員会）Directive・EMEA（European Medicines Agency；欧州医薬品庁）Guidance等の資料を収集し、その内容を検討した。国内外の比較検討および国際的な医薬品の研究開発動向から、わが国の先端医薬の研究開発には、前研究の基盤よりむしろ動物での安全性や薬物動態などを確認する非臨床試験や臨床試験（早期および後期ともに）のインフラ整備および先端的医薬品候補物質の医薬品開発に必要な人材の整備がとくに大学等アカデミアにおける研究機関において立ち遅れていることがわかった。また、海外の各種ガイドラインについては、本邦におけるガイドラインの内容と大きな差異や齟齬はなく、むしろ薬事法下の治験とそれ以外の未承認薬を用いた臨床研究という２つの仕組みの並存があるという臨床試験そのもののあり方、また（独）医薬品医療機器総合機構におけるガイドラインの運用などの見直しが必要であることがわかった。

成果発表：

学会発表

学　会　名	18th Singapore Pharmacy Congress
発表テーマ	Regulatory issues and challenges of biologics.
発　表　者	川上　浩司
発表年月日	2006年11月1日

学会誌

学 会 誌 名	人工血液14巻第2号
論　文　名	FDAにおける人工酸素運搬体の研究開発に関するガイダンスの要点
著　者　名	川上　浩司
出　版　元	日本血液代替物学会
発行年月日	2006年8月

その他、雑誌掲載、学会発表、図書、多数

平成１７年度
国際共同研究

神経難病患者のQOL向上を目指す非薬物的介入の開発と効果の検証に関する研究

研 究 期 間：2005年11月1日～2006年10月31日
代表研究者：東北大学大学院医学系研究科　教授　出江　紳一
共同研究者：聖路加看護大学精神看護学　教授　萱間　真美
熊本大学大学院医学薬学研究部　生命倫理学分野　教授　浅井　篤
ミネソタ州立大学看護学部　准教授　Johnson Judith

神経難病患者のQOL低下を予防、改善するためのコミュニケーション介入法（コーチング）と臨床倫理的介入法を開発、検証し、さらに普及させることを目的として研究を行い、以下の成果を得た。1）コーチング介入の有効性を検証し、モデル化した。2）臨床倫理介入のニーズを明らかにし、具体的介入手順案を作成した。3）コーチング介入および臨床倫理介入の効果を質的に検証した。

研究成果の骨格は次の４本の柱からなる。

1）相手の自発的な行動を促進するコミュニケーション技術である「コーチング」を、神経難病患者に適用する。脊髄小脳変性症患者24人を対象としてランダム化比較試験を行い、健康関連QOLと疾病受容の尺度で効果を判定した結果、3か月間にわたる週１回15～30分間の電話によるコーチングにより、疾病への心理的適応尺度の一つである自己効力感が高まることが示された。

2）コーチング介入効果に関する研究結果に基づいて介入のモデル化を行い、臨床研修プログラムを作成した。現在このプログラムが要介護高齢者あるいは脳卒中患者、およびその家族のQOLに及ぼす効果を検証する研究を遂行中である。

3）医療従事者18人を対象としてインタビューを行い、分析結果に基づいた調査研究から、臨床倫理介入に関する医療従事者の態度・意見を分析した。その結果、問題点や現場の制約はあるものの、倫理コンサルテーションを含む臨床倫理介入の必要性が大きいことが明らかとなり、現場のニーズに応じた臨床倫理的介入方法の開発・運用が必要であると思われた。

4）神経難病患者へのコーチング介入技術の特徴を明らかにするために、質的分析として半構造的インタビュー法を用いた主観的評価を行った。その結果、電話によるコーチングで効果的に働いていた機能は、介入者には「傾聴する」、「承認する」と認識され、対象者には「日常生活の場で自分の話ができる」と認識された機能であった。

成果発表：

学会発表

学　会　名	第43回　日本リハビリテーション医学会学術集会
発表テーマ	脊髄小脳変性症患者に対するテレコーチング介入の機能に関する質的分析
発　表　者	出江　紳一
発表年月日	2006年6月2日

その他、雑誌掲載あり

温故知新－第2回－

財団助成研究…その後

第３回短期海外派遣助成採択者
第４回国際共同研究助成採択者
第14回国際共同研究助成採択者

京都大学大学院医学研究科医療経済学分野　教授　　今中　雄一

ファイザーヘルスリサーチ振興財団から小生はまず平成６年に助成をいただいている。

『（平成６年度日本人研究者派遣）米国の医療機関認定合同委員会のサーベイヤ育成の公式研究と実地訓練で修得した技術と情報を活用し、医療機関評価・質向上の我が国独自の展開と開発研修を行うため』これは、ちょうど、財団法人日本医療機能評価機構設立の準備時期だった。これを機に3-4週間に及ぶ公式研修を修了し米国5病院のサーベイ実地研修を行うことができた。もちろん、わが国の病院機能評価・認定制度は、研修も含めて、わが国の独自色の大変強いものである。とはいうものの、研修プログラム設計、評価手法設計や研修などを手伝わせていただき、少しくらいは貢献できたのではないかと身勝手に思っているところもある。上記助成からは話がずれてしまうが、そもそも、「医療の質の研究会（質研）」にて、岩﨑榮先生、郡司篤晃先生、河北博文先生にご指導を受けて研究・実践活動に加わらせていただいていた経緯があったため、若造で研修会講師やサーベイヤ見本など担当して冷や汗ものであった。ベテランの院長先生方に厳しく優しくご指導を賜り後々の糧になっていった。

『（平成７年度国際共同研究）病院医療の質向上活動が及ぼす臨床的・経済的効果：我が国のモデル病院におけるTotal Quality Managementデモンストレーション・プロジェクト実施とその影響の定量的評価 』この研究助成も一つの契機となり、北海道から沖縄までの70数病院がご参加くださり、患者満足度と病院職員の職務満足度、職員の質改善活動を測定し、多施設ベンチマーキングを試みることができた。コアとなる指標の規定要因や構造を分析し、国際学会で高く評価され賞を受けた。現在は、患者・職務満足に加えて、組織文化の調査へと発展し、安全確保や経営向上に役立ちうるツールに向けての研究を進めている。

やや話がそれるが、ちょうどこの年から、日本版DRGを見越して先進的な病院の先生方のご協力、ご指導の下に、入院患者の診療情報とレセプト情報を集め、診療プロセスや医療資源消費の比較・分析・フィードバックを行うQuality Indicator Project（現Quality Indicator and Improvement Project：QIP）を開始することができた。これは、日本版DRG／PPSの試行の立ち上げに寄与し、さらに、それはDPCの事業へと発展した。医事データのE、Fファイルの元祖でもある。DPCの研究事業の中ではパフォーマンス指標や原価（http://med-econ.umin.ac.jp/costing/）などを担当させていただき、今に至っている。一方、QIP（http://med-econ.umin.ac.jp/QIP/）は新しい病院も加わって存続しており、教室員やシステムのパワーアップのもとに、診療活動の細かい分析ができるようになり、フィードバックする指標も少しずつ進歩している。

上記の研究活動群を土台に、この2-3年は、中医協の下の組織と連携しながら、医療の質・安全に必要なコストを把握する研究（http://med-econ.umin.ac.jp/safety_cost/）を行い、また、医療経営人材育成（http://med-econ.umin.ac.jp/keiei/）の領域に注力している。

今年度、貴財団助成の医学医療教育シミュレータの研究に、医療の質確保、関連産業分析の視点から、大研究チームの一員として参加させていただいている。これは有意義に進んでおり、大いに勉強させていただいている。

今後の貴財団の益々のご発展を祈ってやまない。

イベントレポート 1

第13回ヘルスリサーチフォーラム 及び平成18年度 研究助成金贈呈式　充実の内容で開催

平成18年12月2日（土）千代田放送会館（東京都千代田区紀尾井町）にて、約150名の参加者による第13回ヘルスリサーチフォーラム及び平成18年度研究助成金贈呈式が開催されました。今回は過去最多の演題数となり、メインホールでの発表（ホールセッション）に加えて、昼食時に5会場に分かれてポスター形式によるランチョンセッションが実施され、熱気を帯びた討論が繰り広げられました。具体的な内容は以下の通りです。（この項、敬称略）

1. 開会挨拶　（9:30～9:45）

財団法人 ファイザーヘルスリサーチ振興財団 理事長　岩崎　博充

財団法人 医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構 専務理事　岡部　陽二

2. フォーラム（ホールセッション－午前の部－）　（9:45～12:20）

テーマ：医療 Literacy　座長：慶應義塾大学経営大学院 三菱チェアシップ 教授／慶應義塾大学大学院医学研究科委員　矢作　恒雄

★ ユビキタス情報社会におけるヘルスケアに関する研究　早稲田大学大学院国際情報通信研究科 教授　加納　貞彦

電子カルテの受容に関する日韓米の文化比較の研究、および高齢者介護支援用ユビキタスケアシステムについて、その進捗状況と成果を報告し、最後に、今後のユビキタスネット社会におけるヘルスケア支援システムのアーキテクチャを展望する。

☆ 日米医学部における医学教育の現状と課題～臨床技能教育、特に医療面接に重きをおいて～

東京大学大学院 医学系研究科 医療経営政策学寄附講座 客員教授　橋本　英樹

近年医学教育では、診断手技や医療面接などの臨床技能教育が重視されている一方、それらを系統的に教育するための理論的、実証的裏付けがわが国では希薄である。それらの現状と課題について日米比較を通じ整理し、そのあり方につき提言する。

☆ イギリス医療評価システムと消費者視点　社団法人全国消費生活相談員協会 消費者情報研究所 主任研究員　中村　文子

2008年を目途とするイングランドNHS医療改革は患者中心医療の創出を目標に掲げている。05年度で中止されたNHSトラストの格付け制度、同年開始の医療チェック制度、医療消費者からのネガティブな医療評価である苦情等について説明する。

● 患者団体による医療者を対象とする講義が医療者、患者団体、及び医療者－患者間コミュニケーションにもたらす変化の分析：日本の医療システムへの患者団体の参与のしかたとしての「患者による講義」の活用

東日本国際大学福祉環境学部 講師　服部　洋一

患者を中心とする医療・福祉の受け手を講師として、医療者及び医療者を目指す学生らを受講生とする講座を実施し、医療者のケアに対する考え方、患者会の医療システムへのかかわり方、医療者－患者間コミュニケーションの変化を分析した。

テーマ：医療と介護・ケア　座長：国立保健医療科学院公衆衛生看護部 部長　平野かよ子

◆ 介護保険制度の政策過程－日本、ドイツ、ルクセンブルクの介護保険制度比較－

国際医療福祉大学大学院 教授　和田　勝

本研究では、日本、ドイツ、ルクセンブルクの介護保険制度について、介護問題とその対応に関する経過、政策立案過程、制度の基本的枠組み、実施状況と諸問題、制度改正の動向、今後の展望などについて調査分析を行った。

☆ 小規模ケア施設における経営と世話に関する日独国際比較研究
－認知症小規模施設「ハウス・リンデンホフ」の実践－　福岡県立大学人間社会学部 教授　豊田　謙二

認知症の小規模ケア施設「ハウスリンデンホフ」は、2001年の設立ながら、ドイツでは、経営理念と介護方針において、先駆的なポジションにある。この施設をわが国のグループホームとの比較を念頭におきつつ引証する。

☆ 軽度要介護高齢者のアウトカム評価に基づく自立促進方法の開発と実用化

国際医療福祉大学小田原保健医療学部 看護学科長・教授　島内　節

本研究では、在宅における軽度要介護高齢者自立度向上への効果を高めるために、2時点で事例のアウトカム測定をし、国際比較と国内での地域比較によって、どのような生活のしかたとサービスが効果を高めやすいかを明らかにした。

● エビデンスからみた非行のrisk factorとその累積的相互作用

兵庫教育大学 教育・社会調査研究センター 学術研究員　松浦　直己

非行という深刻な社会的問題行動に、どのような精神医学的背景が存在するのかを調べるため、発達的問題、児童期の逆境的体験、および家族・家庭的要因について少年院生を対象に調査し、各要因間の関連を探ることを目的とした。

3. フォーラム（ランチョンセッション－5会場同時開催－）　（12:20～13:25）

A会場　テーマ：医療とサービス

座長：医療法人財団河北総合病院　理事長　河北　博文

☆ 日本の保健福祉システムにおける小規模多機能サービス事業体の機能と役割の再評価と
その定着・発展に向けた要件の明確化、及び施策化にともなう課題に関する研究

社会福祉法人 かがやき会 理事長/地域ケア福祉研究所長　外口　玉子

「小規模多機能型居宅介護」の施策化は、制度化以前から各地で草の根的に取り組まれてきている小規模多機能事業所の活動が前提にあると考えられる。しかし、その現場での試みが社会的に位置づけられないままにある。本研究では海外における地域性をいかした取り組みを把握し、その成立要件を検討し、小規模多機能事業所の意義を国際的視野から捉え直し、その位置づけと定着・発展への課題を明らかにする。

◎ 認知症高齢者のQOL測定尺度の開発

高知大学医学部看護学科　教授　片岡　万里

近年、重度認知症高齢者のQOL向上の重要性が認識され、ケアの確立と相まって、そのケアの妥当性を検証するための尺度の開発も求められている。本研究では、高齢者の客観的観察による項目として表出される顔面の表情及び感情に関する項目等による重度認知症高齢者のQOL測定尺度の開発を行った。

B会場　テーマ：医療とCollaboration

座長：大阪大学大学院人間科学研究科 教授　中村　安秀

☆ 薬剤師の夜間・休日体制および薬剤師業務が患者の安全に及ぼす影響

社団法人 日本病院薬剤師会　専務理事　関口　久紀

薬剤師の夜間・休日体制が患者の安全にどのように影響しているかを明らかにすることを目的とし、実態調査と、ヒヤリハットの調査、面接調査を行った。

☆ 看護労働力需給ギャップの背景とその是正に関する政策対応

同志社大学ビジネス研究科 教授／同志社大学総合政策研究科 教授／同志社大学技術企業国際競争力研究センター センター長　中田　喜文

看護労働力の需給状況をマクロおよびミクロレベルで分析し、その現状及び政策的課題を抽出した。また、需給ギャップに対する現状の政策対応である、「看護力再開発事業」の実態とその有効性についても検討を加えた。

● 医薬品産業における知的財産保護

東京大学先端科学技術研究センター 特任助手　桝田　祥子

日本の国内医薬品産業における知的財産保護のあり方を検討し提言することを目的として、「新薬市場独占期間」に着目して、日・米・欧における制度の国際比較、および、日本で1988年以降に承認された新薬224品目についての実質特許有効期間(EPL)の調査をして、日本の新薬市場の実態の把握・分析を行った。

C会場　テーマ：医療安全

座長：日本大学医学部社会医学講座医療管理学部門 教授　大道　　久

医療安全風土尺度の開発と応用－医療現場の安全風土とインシデント・アクシデント報告の関係をさぐる－

九州大学大学院医学研究院 医療システム学講座　博士課程大学院生（医師）　松原　紳一

患者の安全のための組織指標となりうる尺度を開発する。同尺度による調査から，医療事故防止活動のあり方を提案し，職場の安全風土とインシデント・アクシデント報告件数の関係を検討する。

● 手術部位感染（SSI）サーベイランスシステムの開発と消化器外科部門における
SSI発生率の算定及び発生重要因子の推定

広島国際大学薬学部　講師　木村　幸司

手術部位感染（SSI）サーベイランスを簡便，正確に実行するために市販ソフトを利用して独自の電子システムを開発した。

介護保険施設における不適切な薬剤使用のprevalenceとrisk factorに関する研究

国立保健医療科学院疫学部 協力研究員　庭田　聖子

Beers criteriaは、不適切な薬剤使用の実態を把握する目的で最もよく用いられ、諸外国では施設や在宅の高齢者を対象とした調査報告が多くなされている。しかしわが国の介護保険施設では、施設系列をまたいだ横断的な調査はない。そこで本研究では、包括的アセスメント表MDS2.1を使用する介護保険施設を対象に調査を行った。

D会場　テーマ：医療支援

座長：京都大学大学院医学研究科医療疫学分野 教授　福原　俊一

● 沖縄県離島における障がいのある子どもとその家族に対するサポート現状

大阪教育大学 実践学校教育講座 助教授　永浜　明子

離島での障がい児とその家族への保健医療サービスの現状を把握し、家族を中心としたサポートのあり方を検討した。

☆ 保健医療のアウトカム評価に関する国際共同研究－多文化間におけるスコアの変換

国立保健医療科学院技術評価部 開発技術評価室長　山岡　和枝

QOLスコアの「文化差を超えた妥当性」について、日本とオランダのがん患者を対象に、QOL尺度スコア（EORTC QLQ-C30およびHRQOL20）の従来のスコア法の適用可能性および経時的な変化における反応性（経時的妥当性）を検証し、多文化間における等価性を有するQOL尺度スコア変換の方法を検討するための研究プロトコルを策定することを目的とした。

● 児童虐待発生予防推進を目指した資源開発－予防的介入のきっかけを早期に掴むためのツール開発と試行－

聖路加看護大学大学院　博士後期課程２年　疋田理津子

児童虐待の発生予防の推進のためには、妊娠期から予防的介入が必要な対象・その優先順位を明確にし、早期介入が必要な対象に、タイムリーな支援を実現することが必要である。従来より母子保健対策を中心的に担ってきた保健師の視点から、児童虐待の発生予防の推進へ向けた具体的課題を明確にし、その課題への段階的取り組みを研究者と協働で行っている経過を報告する。

◆印は平成15年度の国際共同研究A助成による研究／★印は平成15年度の国際共同研究B助成による研究／☆印は平成16年度の国際共同研究助成による研究
●印は平成16年度の国内共同研究助成による研究／◎印は平成16年度の日本人研究者海外派遣助成による研究／無印は平成18年度一般公募演題

E会場　テーマ：医療とあらたな知見　　座長：千葉県立東金病院　院長　平井　愛山

☆ 初回後十字靭帯温存型人工膝関節置換術の日米２患者群の比較：人工股関節置換術の日米２患者群比較と対比して
Primary Posterior Cruciate Retaining Total Knee Arthroplasty:a Comparison of American and Japanese Cohorts
信州大学医学部　運動機能学・整形外科　助教授　小林　千益
後十字靭帯温存型人工膝関節置換術(PCR-TKA)の臨床的およびX線学的耐用性を、日米患者群間で比較した。

○ オーダーメイド口腔ケアシステム構築のための病原性バイオフィルムの殺菌効果判定技術の確立
新潟大学教育研究院医歯学系う蝕学分野　助手　竹中　彰治
高齢者、要介護者に焦点を当てて、その人の自立度と口腔状態、生活習慣によってカテゴリー分類して口腔ケアプログラムを立案する、いわばオーダーメイド口腔ケアシステムの提供を最終目標として、口腔内に形成される病原性バイオフィルムに対する各種ツールの殺菌効果をリアルタイムに解析する技術の確立を目指した。

◎ 参照原価制度下のNHS原価計算の展開
大阪市立大学大学院経営学研究科 助教授　荒井　耕
イギリスNHSでの原価計算はすでに20年以上の歴史を持つが、その中心目的や性質は時代とともに変化してきた。本報告では、内部市場制度下のNHS原価計算からの変化に注目しつつも、参照原価制度下のNHS原価計算に焦点を当てて、その内容を明らかにする。

4. 研究助成金贈呈式　（13:30～14:10）

◆ 来賓挨拶

厚生労働省大臣官房厚生科学課長　　**藤井　充　氏**
ファイザー株式会社代表取締役社長　　**岩崎　博充　氏**

藤井 充 氏　岩崎博充氏

◆ 第15回（平成18年度）助成案件選考経過・結果発表

選考委員長 開原成允氏（国際医療福祉大学大学院長）より、助成応募状況と選考の経過・結果について説明されました。

（採択者リスト：本誌P16～P17に掲載）

◆ 応　募　（単位：件）

	第15回	第14回
国際総合共同研究	－	11
国際共同研究	64	84
海外派遣	－	58
短期国内招聘	－	5
中期国内招聘	－	0
若手海外留学	－	17
若手国内共同研究	66	81
計	130	256

◆ 採　択　（単位：件、千円）

	第15回		第14回	
	件数	金額	件数	金額
国際総合共同研究	－	－	1	10,000
国際共同研究	5	21,000	18*	89,800
海外派遣	－	－	10	17,700
短期国内招聘	－	－	2	2,000
中期国内招聘	－	－	0	0
若手海外留学	－	－	8	30,100
若手国内共同研究	13	23,790	17	30,400
計	18	44,790	56	180,000

＊国際総合共同研究申請者中、国際共同研究としてのクラス変更採択者3名を含む

◆ 研究助成金贈呈式

研究助成採択者に財団岩崎理事長より、贈呈状が手渡されました。

5. フォーラム（ホールセッション－午後の部）　（14:10～18:45）

テーマ：医療と評価・ガイドライン　　座長：国立国際医療センター 名誉院長　小堀鷗一郎

☆ 新規抗うつ薬開発のグローバリゼーションと高齢化社会における
難治性うつ病の治療ガイドラインに関する国際比較研究
国立精神・神経センター精神保健研究所　部長　教授　山田　光彦
うつ病対策は先進国共通の課題であるが、医薬品開発状況の違いにより日米で承認されている抗うつ薬の種類が大きく異なるなど、難治性うつ病の国際的標準化治療ガイドラインの確立にはほど遠い現状である。その実態を国際比較し、問題を探る。

● 外来患者に対する糖尿病診療の質の評価－Evidence-based Medicineに基づく診療ガイドラインを参考にして
独立行政法人国立病院機構京都医療センター 臨床研究センター 予防医学研究室　研究員　岡崎研太郎
近年我が国においても、種々の疾患で診療ガイドラインが作成され、同時に診療の質についても研究が始められてきている。本研究では、Evidence-based Medicineに基づいて作成された「糖尿病診療ガイドライン」（日本糖尿病学会）を参考として、糖尿病外来診療の質を検討した。

★ ベトナムにおける糖尿病の実態と予防戦略
独立行政法人国立病院機構京都医療センター　院長　葛谷　英嗣
アジアでの糖尿病人口の増加が著しく、その予防とコントロールのため実施可能な戦略を明らかにすることは早急の課題である。本研究では、ベトナムにおける糖尿病の実態調査と、その効果的介入技法について検討した。

☆ 地域で生活を送り続けている精神障害者の病状・機能および生活の実態と支援体制との関連に関する記述的研究
－精神障害者へのAssertive Community Treatment （ACT）の試行とその評価－
熊本大学医学部保健学科精神看護学　教授　宇佐美しおり
本研究は、精神障害者の病状、社会的機能および生活上の機能の違いに応じてどのような地域生活支援体制が必要なのかを検討するため、地域での生活が継続できている精神障害者の病状、機能、生活の実態を明らかにし、さらに、5名の精神障害者へACTと呼ばれる地域生活支援を実施し、評価を行った。

テーマ： 医療と薬剤

座長：国際医療福祉大学薬学部教授　薬学部長／日本病院薬剤師会　会長／日本薬剤師会　副会長　伊賀　立二

☆ Beers criteriaの日本版の開発

国立保健医療科学院　疫学部長　今井　博久

処方薬剤の副作用は、高齢患者に重篤な健康障害をもたらす。この研究の目的は、Beers基準の方法論を踏襲して、日本における65歳以上の高齢患者には不適切と考えられる薬剤使用の基準を開発することである。

● 適正な新退院基準による結核患者の入院日数短縮化が及ぼす治療成績変化と治療費節減効果の検討

国立国際医療センター　呼吸器科レジデント　森野英里子

当院結核病棟では2003年1月に喀痰塗抹陽性患者の退院基準を培養陰性化から塗抹陰性化に変更し、地域の協力により退院後DOTSを積極的に導入した。この新基準による早期退院が治療効果と治療費に与える影響を検討した。

◎ トロント小児病院における小児臨床研究のインフラ

トロント小児病院 集中治療部リサーチフェロー　植松　悟子

北米有数の小児病院のひとつであるトロント小児病院の臨床研究支援体制の構造・内容とその運営実態と問題点を明らかにすることによって、本邦の小児臨床研究構造設備の指針の参考とする。

★ 進行非小細胞肺癌の病態、予後の変遷

学習院大学経済学部　教授　南部　鶴彦

代理発表者：国立がんセンター東病院病棟部６Ｂ病棟医長　久保田　馨

肺癌は我が国のがん死亡の第１位であり、非小細胞肺癌は肺癌の80％以上を占める。1990年代以降、第3世代抗癌剤の臨床導入、2002年にはゲフィチニブが承認され、20～30％の患者に著明な腫瘍縮小効果が示されているが、進行非小細胞肺癌に関する病態、予後に関するアウトカム研究は数少ないため、本研究を実施した。

テーマ：医療と生命倫理

座長：東海大学法科大学院 教授　宇都木　伸

★ 英米、独仏、日本における生命倫理思想の比較思想論的検討およびその社会的応用に関する研究

帝京平成大学ヒューマンケア学部　教授　飯田　亘之

2004年7月の総合科学技術会議生命倫理専門調査会の「ヒト胚の取り扱いに関する基本的考え方」最終発表を機に、胚研究にまつわる人間の尊厳問題について、その報告書の考え方、ドイツ、フランス、EU、アメリカなどの考え方を比較検討した。

● 多施設共同研究における審査体制や内容に関する研究

京都大学大学院医学系研究科 社会健康医学系専攻 医療倫理学分野 博士課程　長尾　式子

多施設共同研究に協力している各研究協力施設の倫理委員会の審査体制や審査内容について、実際に研究審査を行った審査資料から検討することを目的に調査を行い、多施設共同で行う医学研究の審査における現状を明らかにした。

☆ ヒト保存生体試料を用いた研究に関する、科学研究者および政策研究者の態度についての国際調査

滋賀医科大学 社会医学講座福祉保健医学部門 講師　喜多　義邦

代理発表者：東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 医療倫理学分野 助手　松井　健志

近年の遺伝子解析技術の発展に伴い、ヒト保存生体試料の使用に対する様々な倫理的懸念が生じており、倫理的に検討すべき課題は多い。本研究では、日本及び外国の科学者、倫理委員会委員などを対象に質問紙調査を実施し、これらの問題に対する対象者の現時点での態度について調査した。

テーマ：医療とアカウンタビリティー

座長：東京大学　名誉教授　出月　康夫

● 医師・研究者主導の臨床試験・治験における医療費と補償・賠償について（第２報）

京都大学医学部附属病院 探索医療臨床部 助手　村山　敏典

わが国の臨床試験は、省令GCPにより厳格に規制されている“治験”以外に、薬事法外の“自主臨床試験”がある。後者には法的規制がなく、補償保険もない。すなわち、被験者は等しく自らの健康回復と社会への貢献を願って臨床試験に参加されるものの、治験か否かにより、権利擁護や利益還元には大きな差異が生じる。この問題解決の糸口を探るための活動と今後の課題について発表した。

● 救急医療従事医師の過重労働と疲労についての産業保健的研究

杏林大学医学部衛生学公衆衛生学 大学院（博士課程）　岡本　博照

日本での救急医師の過重労働の実態把握と産業疲労を評価することを目的に、国内の医療機関12施設に勤務する医師233名を対象に、救急当直・夜勤に関わる勤務に焦点を当てた調査を行い、産業疲労の評価を試みた。

☆ 途上国の感染症対策における病院医療の果たす役割

国立感染症研究所 寄生動物部 第３室（輸入・外来寄生動物）　室長　大前比呂思

従来、医療サービスの果たす役割が注目されてこなかった寄生虫症を中心に、感染症対策における病院医療の果たす役割の変化について調査した。

☆ 在日外国人への有効な精神医療・保健システムの構築に向けて
－精神障害者を家族に持つヴェトナム人の精神疾患の概念と対処行動パターンについての研究－

武蔵野大学人間関係学部人間関係学科 助教授　辻　　惠介

マイノリティの「精神障害に対する概念と対処行動」という視点からの研究を行い、文化的感受性に富んだ精神保健福祉サービスとは何かということを深く探り、その樹立の形態を行政に提示することを目的に、ヴェトナム人の精神障害の捉え方と対処行動、並びに精神保健システムと精神障害者への支援について明らかにする。

★印は平成15年度の国際共同研究B助成による研究／☆印は平成16年度の国際共同研究助成による研究／●印は平成16年度の国内共同研究助成による研究
◎印は平成16年度の日本人研究者海外派遣助成による研究／○印は平成17年度の日本人研究者海外派遣助成による研究

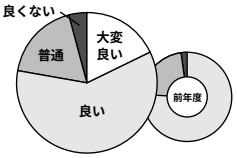
本フォーラムの内容をまとめた講演録をご希望の方は本誌に同封の申込書にて財団事務局までお申し込み下さい。
（尚、当日フォーラムにご参加された方には、３月下旬に既に送付致しております。）

第13回ヘルスリサーチフォーラム 及び 平成18年度 研究助成金贈呈式 アンケート結果報告

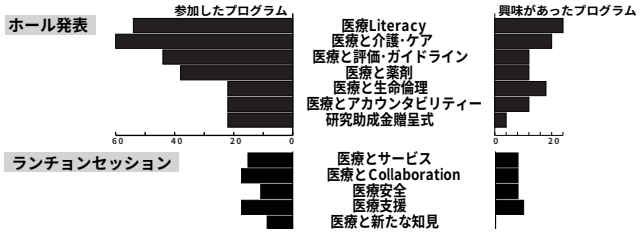
第13回ヘルスリサーチフォーラムの会場で行ったアンケートの結果は以下の通りでした。（回答数は53件でした。）

Q1 ヘルスリサーチフォーラムの内容全般について

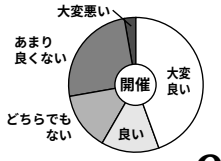
「良い」との評価が多数を占めました。

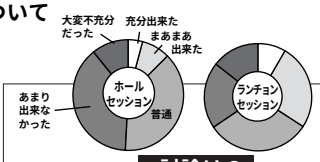


Q2 参加したセッション（複数選択）と、最もご興味のあったセッションはどれですか？



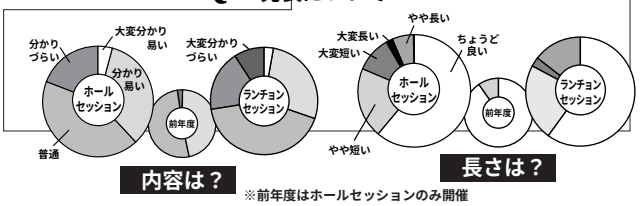
Q3 ランチョンセッションの開催について





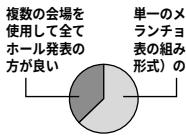
討論は？

Q4 発表について



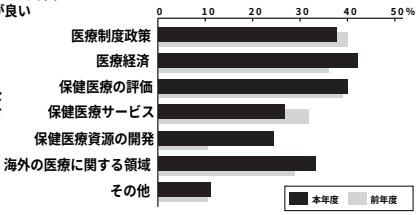
※前年度はホールセッションのみ開催

Q5 開催形式について

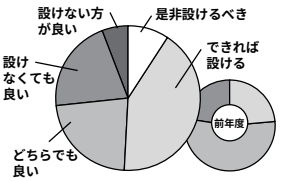


今回初の試みだったランチョンセッションとの併催が支持を受けております。

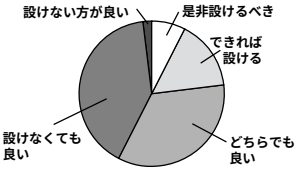
Q6 今後本フォーラムで取り上げて欲しい領域は？（複数回答）



Q7 ゲスト講演について



Q8 情報交換会について



ご意見・ご希望

ホール発表については「学会レベルの発表もあり、医療現場の課題の報告等、すばらしかった」、ランチョンセッション開催について「発表者との距離が短く、自由に討論が出来た／討論が深まった」等、概して好評を得ましたが、会場が狭かった、また演題数の多さから「全体的にスケジュールがタイトだった」との意見も頂きました。

このアンケート結果を参考にし、今後ますます充実したヘルスリサーチフォーラムにしていきたいと思います。ご協力ありがとうございました。

第15回（平成18年度）助成案件 採択一覧表

（順不同・敬称略）

平成18年度　国際共同研究採択者

安藤　満代（あんどう　みちよ）
聖マリア学院大学 看護学部　教授

研究テーマ　日本、韓国、英国での回想法の内容分析を元にして日本人特有の考え方や精神性（スピリチュアリティ）を明らかにし、日本人のがん患者に特化した回想法の開発を行う。
共同研究者　Ahn Sung-Hee
The Catholic University of Korea　Associate Professor
共同研究者　George Fieldman
Buckinghamshire Chilterns University　Professor
共同研究者　Moorey Stirling
South Londong & Maudsley NHS Trust
Professor
助成金額　3,000,000円　本研究期間　06.9.1～08.3.31

津谷　喜一郎（つたに　きいちろう）
東京大学大学院薬学系研究科 医薬政策学　客員教授

研究テーマ　薬剤経済学において増分費用効果比がいくら以下なら費用対効果に優れているといえるか、各国の保険償還にも影響する可能性のあるその閾値を日韓を中心とした東アジア地域でインターネット調査により測定する。
共同研究者　Sang-Cheol Bae
Hanyang University College of medicine　Professor
共同研究者　成　倫慶
東京大学薬学系研究科 医薬政策学　研究生
助成金額　3,000,000円　本研究期間　06.11.1～07.10.31

谷川　武（たにがわ　たけし）
筑波大学大学院人間総合科学研究科 社会環境医学専攻 社会健康医学　助教授

研究テーマ　睡眠時無呼吸症候群のスクリーニングとその予防の費用効果についての日米比較疫学研究
共同研究者　Folsom Aaron
University of Minnesota, Division of Epi　Professor
助成金額　5,000,000円　本研究期間　06.11.1～07.10.31

石田　博（いしだ　はく）
山口大学医学部附属病院医療情報部　助教授

研究テーマ　外来定期受診によるがんの早期プログラムの費用効果分析－肝細胞癌に対する治療戦略の日米差からみた評価
共同研究者　井上　裕二
山口大学医学部付属病院医療情報部　教授
共同研究者　John B. Wong
Tufts-New England Medical Center Professor, Chief of Division
助成金額　5,000,000円　本研究期間　06.4.1～08.3.31

福田　敬（ふくだ　たかし）
財団法人 医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構　研究部長

研究テーマ　新薬への薬剤経済評価の活用方法に関する国際比較研究
共同研究者　西平　賢哉
日本貿易振興機構ニューヨークセンター　Director
共同研究者　満武　巨裕
財団法人 医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構
研究部　主任研究員
共同研究者　渡辺　茂
財団法人 医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構
企画調査部　企画推進担当部長
助成金額　5,000,000円　本研究期間　06.11.1～07.10.31

合　計　件数 5件　金額 21,000,000円

平成18年度　国内共同研究採択者

田中　祐次（たなか　ゆうじ）
東京大学医学研究所探索医療ヒューマンネットワーク部門　助手

研究テーマ　患者、患者家族、医療者の暗黙知を形式知にすることで相互のコミュニケーションの向上を図り、学問とすることで医療メディエーターを育成し、患者、患者家族、医療者の間にはいり相互の信頼関係の構築を補助する。
共同研究者　濱木　珠恵
東京都立府中病院　医員
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.11.1～07.10.31

大倉　美佳（おおくら　みか）
金沢大学大学院医学系研究科 保健学専攻看護科学領域
健康発達看護学講座 地域看護学分野　助手

研究テーマ　行政分野で働く保健師のキャリア志向の尺度開発
～信頼性・妥当性の検討～
共同研究者　野呂　千鶴子
三重県庁保健福祉部医療政策室看護・統計グループ保健師
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.11.1～07.10.31

小田部　貴彦（こたべ　たかひこ）
北里大学薬学部臨床薬学研究センター医薬品情報部門　大学院生

研究テーマ　薬剤師の疲労の日内変動と調剤エラーへの影響及びその要因に関する研究
共同研究者　土屋　文人
東京医科歯科大学歯学部付属病院薬剤部　薬剤部長
共同研究者　木村　昌臣
芝浦工業大学工学部情報工学科　講師
共同研究者　大倉　典子
芝浦工業大学工学部情報工学科　教授
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.9.1～07.3.31

古本　尚樹（ふるもと　なおき）
北海道大学大学院医学研究科 社会医学専攻地域家庭医療学講座
プライマリ・ケア医学分野（医療システム学内）　博士課程

研究テーマ　市町村合併による過疎地医療機能の変化とその対策に関する研究
共同研究者　木佐　健悟
JA北海道厚生連 帯広厚生病院 総合診療科　医師（後期研修医）
助成金額　590,000円　**本研究期間**　06.7.1～07.8.31

庭田　聖子（にわた　さとこ）
国立保健医療科学院疫学部　協力研究員

研究テーマ　在宅高齢患者に対する薬剤の実態と安全性に関する研究（65歳以上の在宅患者に対し「安全面から避けるべき処方」のprevalenceとrisk factorを明らかにし、適切な薬剤処方に向けた方策（ガイドライン等）を開発する）。
共同研究者　大滝　康一
旭川医科大学医学部附属病院薬剤部　薬剤師
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.11.1～07.10.31

伊藤　美千代（いとう　みちよ）
東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻　健康社会学教室　大学院生（博士課程）

研究テーマ　難病患者を対象とした「IPS(Individual Placement and Support)」モデルに基づく保健・医療と就労の総合支援プログラムのインパクトに関する評価研究
共同研究者　春名　由一郎
独立行政法人 高齢者・障害者雇用支援機構障害者職業総合 センター　研究者
共同研究者　山崎　喜比古
東京大学大学院 医学系研究科 健康科学・看護学専攻健康社会学分野　助教授
共同研究者　佐藤　三穂
北海道大学医学部保健学科 看護学専攻 成人・老人看護学　助手
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.11.1～07.10.30

寒水　孝司（そうず　たかし）
大阪大学 臨床医工学融合研究教育センター　特任助教授（常勤）

研究テーマ　臨床評価過程における累積情報の統合的活用に向けた統計基盤の研究
共同研究者　濱崎　俊光
大阪大学大学院医学系研究科　助教授
共同研究者　吉村　功
東京理科大学工学部経営工学科　教授
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.11.1～07.8.31

森本　卓哉（もりもと　たくや）
大分大学医学部附属病院 臨床薬理センター　副センター長、助教授

研究テーマ　薬剤処方行動学の研究～日本における医師の処方行動に関する研究および諸外国における処方システムの動向調査～
共同研究者　重藤　靖道
大分県臼杵市医師会立コスモス病院　薬剤部長
共同研究者　稲野　彰洋
北陸臨床試験支援センター　センター長
共同研究者　小野寺　俊江
みえ記念病院　呼吸器内科医長
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.11.1～07.10.30

堀　里子（ほり　さとこ）
東京大学大学院薬学系研究科医薬品情報学講座　助手

研究テーマ　ファーマコヘルスリサーチ～薬学および社会・人間科学の融合による薬物治療に関するヒヤリハット事例解析
共同研究者　石橋　久
福岡市薬剤師会薬局百道店　薬局長
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.11.1～07.10.30

坂本　なほ子（さかもと　なほこ）
順天堂大学医学部公衆衛生学教室　助手

研究テーマ　日本における疫学研究の公益性とプライバシー保護のバランスについての検討と社会的合意形成ならびにサイエンス・コミュニケーションのあり方に関する研究
共同研究者　掛江　直子
国立成育医療センター研究所　成育保健政策科学研究室長
助成金額　1,200,000円　**本研究期間**　06.11.1～07.10.31

小原　泉（こはら　いずみ）
東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科 先端侵襲緩和ケア看護学　大学院生（博士後期課程）

研究テーマ　抗悪性腫瘍薬第Ⅰ相試験参加を情報提供された患者の意思決定過程に関する研究
共同研究者　武田　祐子
慶応義塾大学看護医療学部　教授
共同研究者　内富　庸介
国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部部長
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.11.1～07.10.31

森島　祐子（もりしま　ゆうこ）
筑波大学人間総合科学研究科　助手

研究テーマ　医療経済および患者や家族側の顧客満足度の観点からの在宅症例の解析・評価、最適化した在宅医療の提供に関する研究
共同研究者　平野　国美
ホームオン・クリニック　院長
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.10.1～07.9.30

大西　弘高（おおにし　ひろたか）
東京大学医学教育国際協力研究センター　講師

研究テーマ　医療コミュニケーションスキルと臨床推論能力は医学的知識が増えるにつれてどのように変化するか
共同研究者　石川　ひろの
帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座　助手
助成金額　2,000,000円　**本研究期間**　06.10.1～08.9.30

合　計　**件数** 13件　**金額** 23,790,000円

平成18年度研究助成採択合計　件数 18件　金額 44,790,000円

イベントレポート 2

第3回ヘルスリサーチワークショップを開催 ・・・存在意義を高める日本のヘルスリサーチへの新たな試み

開会挨拶

平井愛山さん
（本ワークショップサポーター）
千葉県立東金病院 院長

平成19年1月27日（土）・28日（日）に、ヘルスリサーチ分野、保健・医療分野及び行政分野の研究者・実務担当者、患者団体の代表者、その他の計約50名の参加を得て、第3回ヘルスリサーチワークショップをアポロラーニングセンター（ファイザー（株）研修施設：東京都大田区）で開催しました。
今回の基本テーマは「End of Life ― 現代人の生の行方を考える ―」です。

■ 第１日目■

＜オリエンテーション＞
第１日目は、まず、オリエンテーションにより、第1回、第2回に引き続き、本ワークショップの最大の目的が多彩な人材による『“出会い”と“学び”』であり、「誰かが教えてくれる研修会ではなく、異分野の方々による討議を通じてお互いの新たな“気づき”を重視し、参加する一人ひとりが楽しみながら“何か”を始めるためのお手伝いをするための集まり」をコンセプトとしていることが説明されました。そして、この趣旨に従って、本年もワークショップ中は、肩書きや立場を忘れるために、お互いに「さん」で呼び合うというグランドルールが設定されました。
今回は「End of Life ― 現代人の生の行方を考える ―」というテーマであるだけに、特に「明るく楽しく議論する」ことが強調されました。

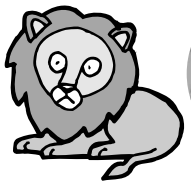
▲廣田孝一さん
（財団事務局長）

今井博久さん（本ワークショップ幹事）▲

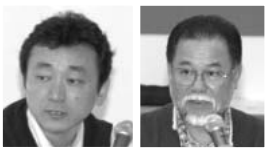
グランドルール
① 「さん」付けで呼ぶ（肩書きや立場を忘れる）
② 相手を非難しない
③ 人の話を最後まで聴き途中でさえぎらない
④ 話をするときは「トーキングスティック」として必ずマイクを使う
⑤ 明るく楽しく議論する

＜自己紹介＞
次に参加者、幹事・世話人等が所属するチームごとに「初恋について」「どんな『前世』だと思いますか？」「『最後の晩餐』には何を食べたいですか？」「生まれ変わったら何になりたいですか？」についての一言を付け加えて、自己紹介が行われました。
第1～3回共にフル参加の方も多く、ユーモア溢れる自己紹介には、会場からの笑い声が絶えず、初参加の方々の緊張も解けて、和やかな雰囲気のスタートとなりました。

Lion（ライオン）チーム



①　②　③　④　⑤



左・今井博久さん（本ワークショップ幹事）
国立保健医療科学院疫学部 部長
右・島内憲夫さん（本ワークショップ世話人）
順天堂大学スポーツ健康学部健康学科 助教授
ファシリテーター

⑥　⑦　⑧　⑨　⑩

①秋山美紀さん（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特別研究講師）、②岡村世里奈さん（国際医療福祉大学 医療福祉学部 医療経営管理学科 専任講師）、③尾上佳代子さん（宮崎大学医学部 看護学科地域・精神看護学講座 教授）、④鬼塚一郎さん（久留米大学医学部 内科学講座 心臓・血管内科 助手）、⑤後藤励さん（甲南大学経済学部 専任講師）、⑥都竹茂樹さん（日本ボディデザイン医科学研究所 所長）、⑦中西三春さん（(財)医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構 研究部 研究員）、⑧中村伸一さん（国保名田庄診療所 所長 あっとほ～むいきいき館 ジェネラルマネジャー）、⑨野原正平さん（NPO法人 静岡県難病団体連絡協議会 理事長）、⑩松浦直己さん（兵庫教育大学 教育・社会調査研究センター 学術研究員）

※参加者・関係者の所属は本ワークショップ開催時のものです。また、敬称はグランドルールに基づき、全て「さん」とさせて頂きました。

左・中村洋さん（本ワークショップ幹事）
慶應義塾大学大学院経営管理研究科 教授
右・吉川菜穂子さん（本ワークショップ世話人）
聖路加看護大学 看護実践開発研究センター 専任講師
ファシリテーター

Ibis（トキ）チーム

①川口武彦さん（仙台社会保険病院 腎臓内科 後期研修医 京都大学大学院 医療疫学教室 大学院生（博士課程））、②谷原秀昭さん（近畿経済産業局 地域経済部 技術課 支援係長）、③當山紀子さん（厚生労働省 雇用均等・児童家庭局 母子保健課 主査）、④中村雅美さん（日本経済新聞社 編集委員）、⑤野村馨さん（東京女子医科大学 一次診療科 診療部長 教授）、⑥長谷川三枝子さん（（社）日本リウマチ友の会 会長）、⑦服部洋一さん（東日本国際大学 福祉環境学部 講師）、⑧伏見清秀さん（東京医科歯科大学大学院 医療情報システム学分野 助教授）、⑨藤本晴枝さん（NPO 法人地域医療を育てる会 理事長）、⑩山本大助さん（大阪弁護士会 弁護士）

＜基調講演＞

ホームケアクリニック川越 院長 川越 厚さんより、医療の現場で様々な死を看取ってきた立場から「独居末期癌患者の在宅死を考える」のテーマで基調講演をいただきました。

当初予定では、次に、文筆家 池田 晶子さんから「『生死とは何か』現象と倫理のはざまで」との演題により、哲学的な視点からのお話を頂く予定でしたが、体調不良により急遽ご欠席となったため、本ワークショップ世話人の長谷川剛さん、及び同 幹事の中島和江さん（演題：医療現場からみたエンドオブライフを取り巻く諸問題）が、“End of Life”にかかわる倫理的側面や臨床的な問題に関する講演をされました。

※池田晶子さんは本年2月23日にご病気の為、逝去されました。謹しんでご冥福をお祈り申し上げます。

川越　厚 さん

ホームケアクリニック川越　院長／在宅ホスピス協会　顧問／聖マリアンナ医科大学客員教授／帝京大学医学部　非常勤講師

＜パネルディスカッション＞

引き続き、

パネリスト：川越　厚さん
指定発言者：長谷川剛さん
中島和江さん
座　　長：今井博久さん（本ワークショップ幹事）

にてパネルディスカッションが行われ、会場を含めた活発な意見交換が行われました。

分科会での議論の導火線となるような内容の意見交換により、否が応でも分科会での盛り上がりが期待されました。

▲ 長谷川 剛さん

▼パネルディスカッション

▼オリエンテーションの進行係を務められた中村 洋さん（左）、島内憲夫さん（右）

▲ 中島和江さん

情報交換会

▲クイズタイムの司会　左・吉川奈穂子さん、
右・安川文朗さん

▲左・乾杯の音頭を取られる中村安秀さん
（本ワークショップサポーター）
大阪大学大学院人間科学研究科 教授

右・「ご指名により」挨拶をされる佐藤忠夫さん
（財団理事、前事務局長）

＜分科会 ＞

基調講演・パネルディスカッション終了後、第1日目の分科会が開始されました。
今回のテーマ「End of Life」の「Life」に掛けて、

- Lion（ライオン）チーム
- Ibis（トキ）チーム
- Fox（キツネ）チーム
- Elephant（ゾウ）チーム

の4チームに別れて、基本テーマについての討論が行なわれました。
前回までの2回は、予め各チームに個別の“切り口”（論点）が与えられ、それに沿って討論が行われるという形式でしたが、今回は各チームへ“切り口”が予め与えられずに、「End of Life ― 現代人の生(いのち)の行方(ゆくえ)を考える ―」の基本テーマの下に、自由に討論することとされました。
分科会開始当初から各チームとも活発な議論が始まりました。

＜情報交換会＞

夕食時は、立食形式の情報交換会により、このワークショップのもう一つの大きな目的である、参加者相互と幹事・世話人等の“出会い”と親交の輪が広がりました。
情報交換会途中には、恒例となった本ワークショップ世話人によるクイズタイムもあり、和やかな雰囲気で時間が過ぎていきました。
中締めが行われた後でも、多くのグループが夜遅くまで残って歓談や討議をくり広げていました。

左・菅原琢磨さん（本ワークショップ世話人）
国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科 助教授
右・中島和江さん（本ワークショップ幹事）
大阪大学医学部附属病院中央クオリティマネジメント部 病院教授
ファシリテーター

①

②

③

④

⑤

⑥

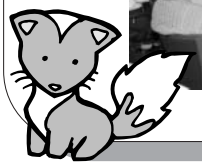
⑦

⑧

⑨

⑩

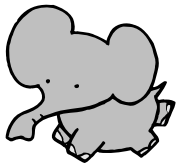
⑪



***Fox*（キツネ）チーム**

①石井拓磨さん（千葉大学大学院医学研究院 公衆衛生学 助手（同医学部附属病院遺伝カウンセリング室・千葉県こども病院遺伝科））、②上塚芳郎さん（東京女子医科大学 医療・病院管理学 教授）、③小川寿美子さん（名桜大学 人間健康学部 講師）、④喜多壮太郎さん（時事通信社 文化部 記者）、⑤鈴木良子さん（学校法人神奈川歯科大学 湘南短期大学 看護学科設立準備室 室長・教授）、⑥高野哲司さん（三井生命保険株式会社 医務研究室査定医長）、⑦高橋輝雄さん（社会福祉法人恩賜財団済生会（本部事務局）事業部 次長）、⑧竹内恒雄さん（社団法人 日本オストミー協会 常務理事 兼 事務局長）、⑨竹下朱美さん（東陶機器株式会社 総合研究所　基礎研究部 機能水研究G）、⑩毛利環さん（新潟大学大学院 医歯学総合研究科歯科矯正学分野 医歯学系・助手）、⑪両角良子さん（富山大学経済学部 講師）

Elephant（ゾウ）チーム



①

②

③

左・長谷川剛さん（本ワークショップ世話人）
自治医科大学付属病院医療安全対策部・呼吸器外科 助教授
右・安川文朗さん（本ワークショップ世話人）
同志社大学大学院総合政策科学研究科 医療政策経営研究センター センター長
ファシリテーター

④

⑤

⑥

⑦

⑧

①梅澤優子さん（聖路加看護大学大学院 看護研究科 成人看護学教室 大学院生）、②尾形裕也さん（九州大学大学院医学研究院 医療経営・管理学講座 教授）、③河原直人さん（早稲田大学 先端科学・健康医療 融合研究機構 講師）、④柴田睦郎さん（北海道医療大学病院小児科 医長 兼 個体差医療科学センター　助教授）、⑤高橋謙造さん（順天堂大学 医学部 公衆衛生学教室 助手）、⑥高村美奈子さん（順天堂大学スポーツ健康科学部 健康学科 健康社会学研究室 助手、⑦田中幸子さん（北里大学看護学部 助教授）、⑧森幸子さん（全国膠原病友の会 副会長 特定非営利活動法人 滋賀県難病連絡協議会 理事長）

■ 第２日目 ■

＜分科会＞
午前中は、前日から引き続いての分科会が行われ、午後からの各チームの発表に備えて、真剣かつ実りある議論が展開されました。

〈 チーム別発表・全体討論 〉
午後からは、再び全員が一堂に会して、チーム別の発表と全体討議へと進みました。
ほとんどのチームは全員が演台に出てきて、このわずか2日間で既に強い連帯感で結ばれたことが感じられます。
午後3時、全プログラムが終了して、充実した内容の余韻を残しつつ散会となりました。

このヘルスリサーチワークショップは、各方面から「ユニークで、特に若手の研究者にとって有意義な試みだ」と高い評価を頂いています。この度、第3回を開催し、このワークショップはますますその存在意義を高めてまいりました。

閉会の挨拶をされる開原成允さん
（本ワークショップアドバイザー）
国際医療福祉大学 大学院長

現在、この第3回ヘルスリサーチワークショップの内容の冊子の作成を取り進めており、8月頃完成の予定です。完成次第、財団ホームページ等でご案内いたします。
また、第4回ヘルスリサーチワークショップのテーマ及び参加者公募のお知らせは、6月頃財団ホームページで公開致します。

当財団ホームページアドレス
http://www.pfizer-zaidan.jp

座長▶▶

中島和江さん

菅原琢磨さん

◀ ライオンチーム

◀ トキチーム

◀ キツネチーム

◀ ゾウチーム

感性に触れる言葉や体験との出会い

名桜大学人間健康学部講師　小川　寿美子

この度のワークショップに参加して感じたことは、いろいろな立場の人がその専門分野の視点でただ単に“客観的”に意見を述べたところで興味ある議論には発展せず、むしろ様々な専門分野の立場を忘れて、“実は･･･”といった個人の思いを“主観的”に赤裸々に語り合ったとき、はじめて議論は有機的に相互作用しあい面白みを持つ、という点である。

我々は、普段よりそれぞれの社会的立場や専門性を振り回し“評論家”として事象を語ることに慣れきってしまっている。しかし“評論”だけでは第三者の心を動かすことはできない。感性に触れる言葉や体験に出会い、身につまされて感じたときに、人ははじめて感動し、そこで得たエネルギーで新たな行動の原動力をもらえるのではないだろうか。

今回のワークショップで私が得た「End of Life」に関する新しい視野は主に３つある。

第1に、「生」には、①産まれるとき、②生きている間、③死ぬとき、の3つのステージがあり、この世に生を受けた意味を見出せるのも、この世に生きていて良かったと満足して逝くのも唯一自分の意思を反映することのできる「②生きている間」次第、という論点である。

第2に、「死」には一人称（自己）の死、二人称（身近な人）の死、三人称（第三者）の死があり、人は各々の称により「死」の受容度合いが違うのでは、という論である。例えば自己の死には案外ある一定期間を過ぎると受容できるが（がん患者の場合など）、いつまでも受容しがたく辛いのは二人称の死ではないだろうか。

第3に、バーチャル（仮想）社会に慣れきっている現代っ子は、より一層感性を研ぎ澄まさねば「生」に対して不感症になる、という点である。命あるものの誕生や死とまともに向き合う機会を意識的に多く設け、「生命への畏敬」の念に回帰することが緊急課題であろう。

これらワークショップを通じて得た知見を日常生活で実践し、周囲や次世代に語っていく所存である。

第3回
End of
ー現代人の生（いのち）の
に参加

「死に方」を選ぶ時代に

富山大学経済学部講師　両　角　良　子

「End of life－現代人の生の行方を考える－」は非常に重いテーマであるがゆえに、正直なところ、最初、「客観的に議論することが可能だろうか」と不安を感じていた。しかし、「明るく楽しく」というコンセプトの下、積極的な議論で終始充実していたと思う。

ワークショップの中で大きく二つの点が印象的であった。一つは、チームごとのディスカッションの際に、ある研究者が言った言葉で、死は生きているときの続きであって、独立したものではない、という点である。これに則して考えれば、人の「死に方」とは、各個人が生存期間に行う数々の選択の最終的な結果、ということになるだろう。

もう一つは、「死に方」を選ぶ時代に確実に差しかかっている、という点である。家で死ぬか・病院で死ぬか、という死に場所の選択や、健康的な長寿につながる生活習慣でいるか・不健康な生活習慣でいるか、あるいは、延命治療をするか・しないか、という死期の選択など、「死」に関して、人生の中でいくつかの選択項目が考えられる。各個人の「死に方」はそれぞれの選択項目で選択した内容の組み合わせ、ということになるだろう。

個人個人が理念として持っている「死に方」についてのこだわり、換言すれば、「死に方」についての選好（プリファレンス）は、私の知る限り、医療経済学の分野でこれまで明示的に議論されることはなかったような気がする。しかし、「死に方」を自分で選択する、という意識が強くなればなるほど、生きている期間に遭遇する数々の選択の中で、その都度、選ばれる選択肢は、目標とする「死に方」に合ったものとなっていくはずである。それは「死に方」についての選好を反映するものとなるだろう。

いつになるかはわからないが、医療経済学の分野で、「死に方」についての選好を表す効用関数にしたがって、効用最大化問題を解くモデルが出てくるような気がする。今回のワークショップでの議論は、将来の研究の題材を予見するものであると強く感じた。

End of Life, Mortality and the Team Elephant

九州大学大学院医学研究院　医療経営・管理学講座教授　**尾　形　裕　也**

私にとっては、昨年に続き、今回が２回目のヘルスリサーチワークショップへの参加でした。End of Lifeというテーマは、医療経営・管理学分野の研究者としては、専門外といえば専門外、しかし、mortalな存在であるすべての人間にとって関わりのある問題であること、そして何よりも「専門」とか言っても、当然まだ誰も死んだ経験などないのだから、「素人」でも何とかなるのでは、と勝手に（「前向き」に考えて）参加させていただきました。

結果は、昨年以上に「大いに満足」でした。様々な異なる分野や立場の方々との出会い、知的刺激に満ちた自由闊達な意見交換といった点は共通でしたが、今回はテーマがテーマだけに、それこそ狭い「専門」を離れた発言者の「本音」あるいは「地」に近い部分がかなり率直に吐露されていたように思います。かくいう私自身も、ふだん教室ではまず口にすることのない森鴎外の遺書の話などを持ち出して、日本人の死生観なんぞを論ずる始末。ほとんど30年以上も昔の学生時代に戻った気分でした。晩年の夏目漱石は（などと言い出すのもまだ先日の余韻が残っているためか？）芥川龍之介ら若い世代に向けた有名な手紙の中で、「君らの若々しい青春の気が、老人の僕を若返らせたのです」と書いています。今回のワークショップはまさに私にとってはそうした若々しい刺激に満ちた出会いと交流の場でした（もっとも、「晩年」といい、「老人」といっても、実は漱石はこのときまだ49歳、今の私より若いのですから、嫌になりますが）。

なお、今回の出会いは、ワークショップ終了後、数日を置かずして、同じ「象さんグループ」のほとんどの方からメールを頂戴したことからもわかるように、今後「尾を引きそう」です。生来の筆無精でまだ返信すらしていない私としても、ここは一番、本稿をきちんと締め切り前に脱稿することで、取りあえず当面の責をふさぐこととしたいと思います。ファイザーヘルスリサーチ振興財団をはじめ、ワークショップの運営にご高配を賜ったすべての方々に心より感謝を込めて。

HRW
Life
行方（ゆくえ）を考える－して

第３回ヘルスリサーチワークショップに参加して

北海道医療大学病院小児科医長・
個体差医療科学センター助教授　**柴　田　睦　郎**

卒業以来考える医者たるべくウイルス感染を軸に学際的な生涯学習を続けている。ワークショップは他分野の多くの方々と集い対話し自分の思考を深めるのに最適である。小児科医は子どもの誕生から発達する本人と家族に寄り添う存在である。重篤な疾患を持つ新生児の治療決定や予後不良の疾患を持つ児のインフォームド・コンセント（アセント）、デス・エデュケーションが小児科医としてのEnd of Life－現代人の生（いのち）の行方（ゆくえ）を考える－に関連ある関心事であった。今回はグループに自らの患者体験を活かし積極的にピア・サポート活動をされている方を得てお話を聞き、体験の重さに学際的な視点の広がり以上のものを感じた。

私たちのELEPHANTグループは死の受容における関係性・対話の意味を探り、生のエネルギーをキーワードにエッセンスを一枚の図とELEPHANTの頭文字の意味付けに表した。それはこのワークショップがまとめや提言は求めず参加者の自由な発言の記録だけ残す原則だから・・・

個人的には生のエネルギーとQOL、ヘルスビリーフ※1)、SOC※2)、レジリアンス※3)、そしてストレス・コーピング※4) などという語群の概念地図が描けたらと思った。‘貨幣経済が進むと質的な価値が量的な関心によって次々と押しつぶされてくる。私たちの欲求を最終的に満足させてくれるのは結局のところ質的な価値だけだ’と述べたジンメル※5) の言葉を胸に今後も質と量の関連を探り続けたい。

第一回参加に際し推薦者を持たぬ私のためご尽力いただいた佐藤忠夫前事務局長に感謝する。一般病院に勤務し熱意しか持たぬ私に参加の機会を与えて下さった。その後勤務場所がかわり若い医療職の方々の教育に関与することになった。どこにいてもリサーチマインドを持ちつづけることの意義を若い臨床家に伝えていきたい。

幹事・世話人・事務局の方々のご助力に深謝する。

注釈

※1）ヘルスビリーフ	健康信念
※2）SOC	首尾一貫感覚
※3）レジリアンス	心的回復力
※4）ストレス・コーピング	ストレス対処法
※5）ゲオルク・ジンメル	20世紀はじめのドイツの社会学者

第30回評議員会並びに第30回理事会を開催

平成19年度事業は前年度規模を継続

東京都渋谷区の新宿文化クイントビルで、3月1日（木）に第30回評議員会が、3月8日（木）に第30回理事会が開催され、平成19年度の当財団の事業計画、収支予算、任期満了に伴う役員改選、その他が審議されました。

平成19年度は、前年度と同様に財団の基金（約20億円）の運用益を主体とする財団独自の資金を基に事業立案・予算編成を行っており、前年度並みの規模の事業計画となっています。

主な内容は以下の通りです。

（1）助成事業

①「国際共同研究助成」と「若手研究者育成－国内共同研究助成」の2事業のみを実施

助成件数は

「国際共同研究助成」6件……1件500万円以内、総額3,000万円

「若手研究者育成－国内共同研究助成」7件……1件200万円以内、総額1,400万円

として、合計4,400万円です。

②募集時期

平成19年4月～7月6日（金）

③採否通知

平成19年9月下旬

④助成金支払時期

平成19年11月12日（月）以後

第14回ヘルスリサーチフォーラム及び研究助成金贈呈式＜平成19年11月10日（土）開催＞終了以降に支給開始。

（2）財団機関誌「ヘルスリサーチニュース」

前年度に引き続き年間2回（4月・10月）発行とします。

内容面では、財団関連ニュースや成果発表に重点を置き、海外留学助成に基づく留学記、過去の助成採択者の現状報告などを掲載します。

（3）第14回ヘルスリサーチフォーラム・研究助成金贈呈式 及び 講演録

ヘルスリサーチフォーラム及び助成金贈呈式を以下の通り実施します。

開催日：平成19年11月10日（土）
会　場：千代田放送会館（千代田区紀尾井町）
後　援：厚生労働省（予定）
協　賛：医療経済研究機構
テーマ：新しいヘルスリサーチを拓く

平成17年度助成採択者の国際共同研究並びに若手国内共同研究の成果発表、平成17年度海外派遣助成研究発表、平成19年度公募の一般演題発表及び討論等を、前年度と同様に通常のヘルスリサーチフォーラムを1会場方式で開催すると共に、一部の演題を討論に重点をおいたポスター形式ランチョンセッションとして併催します。

フォーラムの内容を記録した講演録は従来通り3,000部作成・配布します。

（4）第4回ヘルスリサーチワークショップ 及び 小冊子

概略下記予定で第4回ヘルスリサーチワークショップを開催します。

開催日　：平成20年1月26日（土）・27日（日）
会　場　：アポロラーニングセンター（予定）
（ファイザー（株）研修施設）
参加者　：40名程度（推薦と公募を予定）
記　録　：翌年度に小冊子を3,000部程度作成・発行します。

テーマ等詳細は、今後のヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人会で決定していきます。

▲理事会で挨拶される厚生労働省
大臣官房厚生科学課長　藤井　充氏

▲第30回 評議員会

▲第30回 理事会

(5) 第8回北里・ハーバードシンポジウムへの後援

従来から実施してきた北里・ハーバードシンポジウムへの後援を、平成19年度も継続します。

これらを含めた財団の平成19年度事業計画は次ページの通りです。

財団関連人事情報

平成19年3月末日付で、定年内規及び本人からの辞意表明により、次の6名の先生方が退任されました。

青木　國雄　氏
水野　　肇　氏
髙橋　則行　氏
町田　豊平　氏
三富　利夫　氏
南部　鶴彦　氏

いずれも当財団の発展に多大なご貢献をいただきました。本誌面を借りて、心から御礼申し上げます。
尚、今回は退任に伴う補充は行いません。

また、平成19年4月1日付で次の先生が選考委員に新たに就任されました。

永井　良三　氏（東京大学大学院医学系研究科内科学専攻循環器内科　教授）

新任選考委員

永井 良三氏

退任された方々

理事

青木 國雄氏

水野　肇氏

評議員

髙橋 則行氏

町田 豊平氏

三富 利夫氏

南部 鶴彦氏

●理事・監事　（敬称略・50音順）

理事長　岩崎　博充（再任）
ファイザー(株)代表取締役社長
常務理事　島谷　克義（再任）
ファイザー(株)顧問
理　事　開原　成允（再任）
国際医療福祉大学大学院長
理　事　黒川　　清（再任）
政策研究大学院大学教授・
日本医療政策機構代表理事
理　事　幸田　正孝（再任）
社会福祉法人恩賜財団済生会理事長
理　事　佐藤　忠夫（再任）
ファイザー(株)社員
理　事　高久　史麿（再任）
自治医科大学学長・
日本医学会会長
理　事　松田　　朗（再任）
(財)厚生年金事業振興団常務理事
理　事　南　　裕子（再任）
兵庫県立大学副学長・国際看護師協会会長
理　事　宮澤　健一（再任）
一橋大学名誉教授
理　事　山崎　幹夫（再任）
新潟薬科大学学長
理　事　湯本　　明（再任）
ファイザー(株)経営企画部門統括部長
監　事　片山　隆一（再任）
公認会計士
監　事　北郷　勲夫（再任）
(財)日本障害者スポーツ協会会長

●評議員　（敬称略・50音順）

評議員　出月　康夫（再任）
東京大学名誉教授
評議員　岩崎　　榮（再任）
(財)日本医療機能評価機構理事・
日本医科大学法人顧問
評議員　岩田　弘敏（再任）
岐阜大学名誉教授
評議員　宇都木　伸（再任）
東海大学法科大学院教授
評議員　大塚　宣夫（再任）
医療法人社団慶成会青梅慶友病院理事長
評議員　大道　　久（再任）
日本大学医学部教授
評議員　河北　博文（再任）
医療法人財団河北総合病院理事長・
東京都病院協会会長
評議員　岸　　玲子（再任）
北海道大学大学院医学研究科教授
評議員　花野　　学（再任）
東京大学名誉教授
評議員　福原　俊一（再任）
京都大学大学院医学研究科
医療疫学分野教授
評議員　矢作　恒雄（再任）
慶應義塾大学名誉教授

●選考委員　（敬称略・50音順）

委員長　開原　成允（再任）
国際医療福祉大学大学院長
委　員　伊賀　立二（再任）
日本病院薬剤師会会長・
日本薬剤師会副会長
委　員　宇都木　伸（再任）
東海大学法科大学院教授
委　員　小堀鷗一郎（再任）
国立国際医療センター名誉院長
委　員　永井　良三（新任）
東京大学大学院医学系研究科
内科学専攻循環器内科教授
委　員　平野かよ子（再任）
国立保健医療科学院
公衆衛生看護部部長
委　員　藤井　　充（再任）
厚生労働省　大臣官房厚生科学課長
委　員　矢作　恒雄（再任）
慶應義塾大学名誉教授

※任期…理事・監事、評議員及び選考委員とも、平成19年4月1日から平成21年3月31日迄の2年間。

●名誉理事　（敬称略・50音順）

名誉理事長　垣東　　徹
(財)ファイザーヘルスリサーチ
振興財団前理事長
名誉理事　青木　國雄
名古屋市社会福祉協議会会長・
名古屋大学名誉教授
名誉理事　大谷　藤郎
国際医療福祉大学総長
名誉理事　岡本　道雄
京都大学名誉教授
名誉理事　加藤　一郎
(学)成城学園名誉学園長・東京大学名誉教授
名誉理事　近藤　健文
環境省公害健康被害補償不服審査会委員
名誉理事　髙橋　則行
日本薬剤師会相談役
名誉理事　南部　鶴彦
学習院大学経済学部教授
名誉理事　町田　豊平
東京慈恵会医科大学名誉教授
名誉理事　水野　　肇
医事評論家
名誉理事　三富　利夫
東海大学名誉教授

平成19年度事業計画

◆◆平成19年度事業概要◆◆

研究等助成

1. 国際共同研究事業

保健医療福祉分野の政策あるいは、これらサービスの開発・応用・評価に資するヘルスリサーチの研究テーマについて国際的な観点から実施するヘルスリサーチ領域の共同研究への助成。

期　　間：原則として1年
助成件数：6件
助成金額：1件　500万円以内　　総額3,000万円を予定
募集方法：公募／財団ホームページ、医事法学会ホームページ、大学病院医療情報ネットワーク（UMIN）、医療経済研究機構レター、ヘルスリサーチニュース（4月号）に公募記事掲載、ポスター配付
大学、研究機関、学会、都道府県医師会／歯科医師会／薬剤師会／都道府県・政令指定都市保健所長会　等

2. 若手研究者育成事業

保健医療福祉分野の政策あるいは、これらサービスの開発・応用・評価に資するヘルスリサーチの研究テーマについて取り組む若手研究者の育成を目的とする助成。

国内共同研究助成

目　　的：若手研究者の国内共同研究助成
期　　間：原則として1年間
助成件数：7件
助成金額：1件　200万円以内　　総額1,400万円を予定
年齢制限：40歳以下（平成19年4月1日現在）
募集方法：公募／財団ホームページ、医事法学会ホームページ、大学病院医療情報ネットワーク（UMIN）、医療経済研究機構レター、ヘルスリサーチニュース（4月号）に公募記事掲載、ポスター配付
大学、研究機関、学会、都道府県医師会／歯科医師会／薬剤師会／都道府県・政令指定都市保健所長会　等

財団機関誌の刊行（ヘルスリサーチニュース）

事業及びその成果を情報として提供し、研究の推進、啓蒙を図る。また、ヘルスリサーチの啓蒙と実践的な展開を目指して情報提供を行う。前年度からの年2回発行（4月10月）を継続実施する。前年度に誌面構成を一新したので、その反響を調査して紙面づくりに反映させる。

配　　付：年2回　A4 20～24頁　9,000部
配付方法：財団関係者、全国大学の医学部、薬学部、看護学部、経済学部、法学部、社会学部、医療機関、都道府県医師会/歯科医師会/薬剤師会/都道府県・政令指定都市保健所長会、報道機関等へ郵送。MRへの配布（約3,000部）は中止。Web利用へ変更。

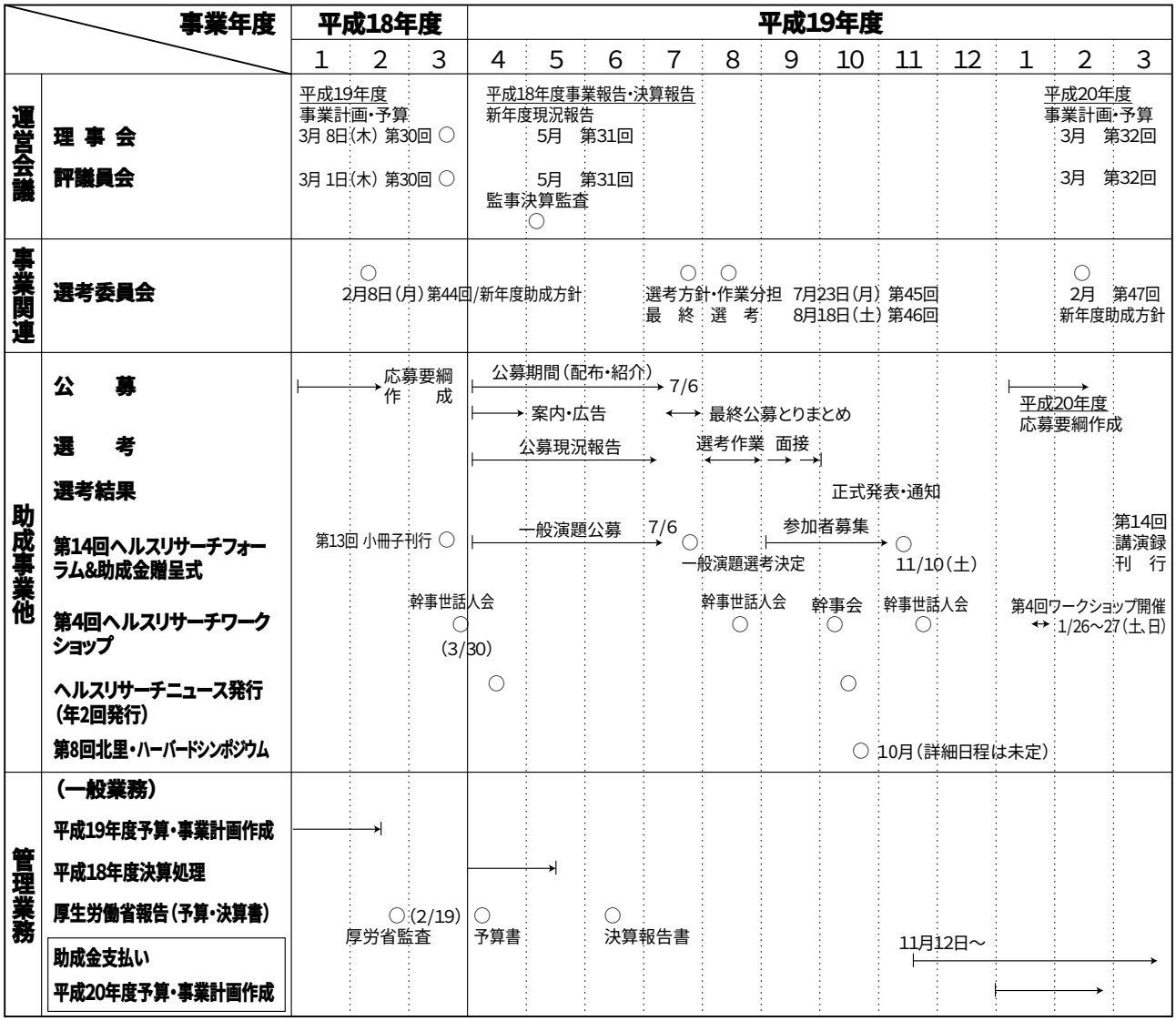
第14回ヘルスリサーチフォーラム・研究助成金贈呈式及び講演録

ヘルスリサーチフォーラムと平成19年度研究助成金贈呈式を併催する。
一般公募演題の発表、平成17年度実施の国際共同研究並びに国内共同研究の成果発表、平成17年度海外派遣助成研究発表、平成19年度公募の一般演題発表及び討論等、通常のヘルスリサーチフォーラムを昨年に引き続き1会場方式で開催すると共に一部の演題を討論に重点をおいたポスター形式ランチョンセッションとして併催する。途中午後の冒頭、通常セッション開始前に平成19年度の研究助成発表・贈呈式を行う。贈呈式においては、厚生労働省大臣官房厚生科学課長、出捐企業代表者挨拶に続いて、平成19年度応募助成案件の選考結果・経過の発表並びに研究助成金授与を行う。ヘルスリサーチフォーラムの成果発表及び平成19年度研究助成内容発表・研究助成金贈呈式の内容は講演録として纏め、平成20年3月に配布する。

テーマ：新しいヘルスリサーチを拓く
開催日：平成19年11月10日（土）
会　場：千代田放送会館（千代田区紀尾井町）
後　援：厚生労働省（予定）
協　賛：医療経済研究機構
参加者：財団役員、選考委員、関係官庁、報道関係者、共同研究発表者、助成採択者、出捐会社役員、LSF懇談会メンバー等　200名
小冊子：A4版　350頁　3,000部

第4回ヘルスリサーチワークショップ及び小冊子	当財団の主たる事業として、将来のヘルスリサーチ研究者・実践者の戦略的な育成とヘルスリサーチという学際的な研究の効果的・効率的な促進を通じて保健医療の向上への貢献を目指している。その一環として、平成18年度に引き続きヘルスリサーチワークショップを開催し、当該領域を志向する研究者・実践者の人的交流と相互研鑽に焦点を当て“出会いと学び”の場を作り、ヘルスリサーチ研究の領域をリードして行きたいと考え、主たる事業として当該ワークショップを開催する。当財団の従前からの主たる事業であるヘルスリサーチ領域への研究助成に新たな命題を創造提供する事を期待すると共にその内容を記録冊子としてまとめ次年度に配布する。 開催日：平成20年1月26日～27日（土・日） 会　場：アポロラーニングセンターを予定（ファイザーの研修施設） 参加者：ヘルスリサーチの研究を志向する多分野の研究者等　40名（推薦と公募を予定） 小冊子：A4版　150頁　3,000部を次年度に作成予定 テーマ：本年度のテーマ等詳細はヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人会で決定する。
第８回北里・ハーバードシンポジウムへの後援	開催予定：平成19年10月（詳細日程は未定） 主　　催：北里大学・ハーバード大学 後　　援：ファイザーヘルスリサーチ振興財団 参 加 者：治験に関係するドクター、製薬会社、規制当局関係者　600人 内　　容：「効率的な新薬開発に関する検討」 テ ー マ：Advanced and Global Drug Development Techniques

◆◆平成19年度予定表◆◆



第14回 ヘルスリサーチフォーラム 及び 平成１９年度助成金贈呈式 開催のお知らせ

第１４回ヘルスリサーチフォーラムを下記により開催いたします。
詳細は次号本誌（平成19年10月発行、秋季号）でご案内いたします。

テーマ：新しいヘルスリサーチを拓く
日　時：平成19年11月10日（土）
午前9時30分～午後6時（予定）
会　場：千代田放送会館
東京都千代田区紀尾井町

内　容：会場発表とポスターセッションを併催
主　催：財団法人 ファイザーヘルスリサーチ振興財団
後　援：厚生労働省（予定）
協　賛：財団法人 医療経済研究・社会保険福祉協会
医療経済研究機構

加藤則子先生よりお詫び

第12回ヘルスリサーチフォーラム発表者加藤則子先生より下記掲載のご依頼がありました。

平成17年（2005年）度 第12回ヘルスリサーチフォーラム記録集に掲載されました“小児のメンタルヘルス推進のための人材開発に関する研究”において、誤解を招く表現がありましたので以下の文を追加したく存じます。『スライド17から23までのデータはクイーンズランド大学大学院心理学部博士課程在籍松本有貴氏の研究によるものである。スライド11及び30においても誤解を生みかねない表現があるが、ブリスベンでのパイロットスタディーは松本氏がマット・サンダース教授の指導で行った彼女の研究である。』これに関することで松本有貴氏とファイザーヘルスリサーチ振興財団にご迷惑をおかけしたことをお詫び致します。

国立保健医療科学院研修企画部　加藤　則子

ご寄付をお寄せ下さい

当財団の活動は、基本財産の運用に加えて皆様からのご寄付により行われていますが、当財団は、ご寄付をいただいた方々が、税務上の特典を受けられる特定公益増進法人の認定を受けております。
特定公益増進法人とは、公益法人のうち、教育又は科学の振興、文化の向上、社会福祉への貢献、その他公益の増進に著しく寄与すると認定されたもので、これに対する個人又は法人の寄付は以下の税法上の優遇措置が与えられます。（詳細は財団事務局までお問い合せ下さい）
手数料のかからない郵便局振込用紙を同封しております。
財団の事業の趣旨にご理解下さるようお願いいたすとともに、皆様からのご寄付をお待ちしております。

ご不明な点は何なりと財団事務局までお問い合わせ下さい。　TEL：03-5309-6712

ご寄付御礼

9月12日以降2月末までに以下の方々からご寄付をいただきました。謹んで御礼申し上げます。

野村　眞弓 様　　江見　康一 様　　高野　哲司 様　　垣東　徹 様　　共和クリエイト株式会社 様

●（財）ファイザーヘルスリサーチ振興財団事務局長交代のお知らせ●

平成18年12月、下記の通り交代致しましたので、ご連絡申し上げます。前任者に賜りましたご懇情に御礼申し上げ、後任者にも変わらぬご交誼とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新事務局長　廣田　孝一　　前事務局長　佐藤　忠夫

編集後記

第３回ヘルスリサーチワークショップのテーマである“End of Life”から、ある言葉をすぐに思い出しました。「人生のなかでわかっているのは、“人はいつかは死ぬ”という一事のみである」という故池波正太郎さんの作品に一貫して流れるメッセージです。池波さんの小説やエッセイはこの20年間何度も何度も読み返しました。同じ小説やエッセイを読んでも30代、40代、50代では受け止め方が異なります。鬼の平蔵、長谷川平蔵（実在の人物で江戸時代の火付盗賊改方長官）に憧れながらも鬼平のようには絶対になれない私ですが、20年間鬼平犯科帳を読み続けるうちに、親しい友人や先輩、後輩、最愛の家族の死を看取ったこともあり、“死ぬことは生きること”だという意味合いがわかってきたような気がします。実在の鬼平は今の私の年齢で亡くなっており、何か因縁を感じましたが、年をとっていくのも悪くはないと思うこの頃です。

財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団
〒151-8589 東京都渋谷区代々木3丁目22番7号 新宿文化クイントビル
TEL: 03-5309-6712 FAX: 03-5309-9882
©Pfizer Health Research Foundation
E-mail:hr.zaidan@pfizer.com ◆URL:http://www. pfizer-zaidan.jp